

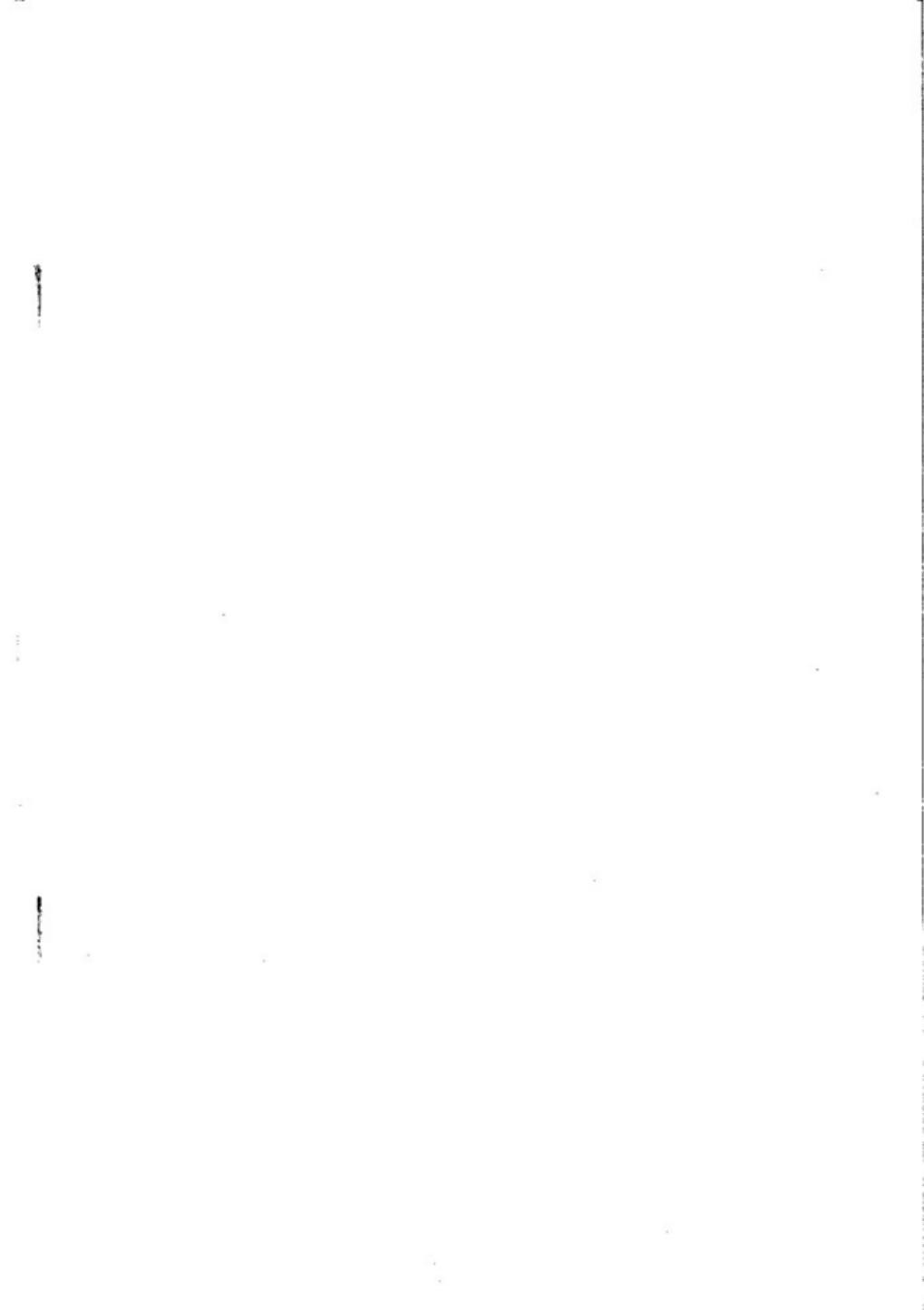
八尾市文化財調査報告10  
昭和58年度国庫補助事業

# 八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書

— 高安古墳群の調査他 —

1984. 3

八尾市教育委員会



## はしがき

八尾市の東部に位置する高安山は、標高486mの峰であります。この山麓には、古代から多くの史跡が残っております。

なかでも高安古墳群は古墳時代後期に属する畿内有数の大型群集墳として知られています。しかし、近世から現代に至るまで、多くの古墳が破壊、盗掘を受け、現在残されたわずかな古墳についても開発の波にさらされることは遠い先のことではないように思えます。

当古墳群については、先学より多くの研究がなされてきましたが、その実態は未だ明らかにされておりませんでした。しかし、今回国庫補助事業として実施した法藏寺境内の古墳も墓地造成に先立つものですが、幸い学術的な発掘調査を実施することで、高安古墳群の内容の一端をはじめて明らかにすることができました。

ここに報告書を刊行することによって、今後の学問の進展に寄与することを念じるものであります。

最後に古墳の保存について御理解をいただいた大覚山法藏寺住職有澤博道氏はじめ、発掘調査に参加した学生諸君に深く感謝するものです。

八尾市教育委員会  
教育長 西崎 宏

## 例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が昭和58年国庫補助事業として計画し実施した「八尾南遺跡他市内遺跡緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は社会教育部文化財室職員 山本昭、米田敏幸を担当者として実施した。
3. 発掘調査及び遺物整理については、下記の諸氏の協力を得た。  
森山憲一、太田修司、前田芳嗣、津田孝二、麻田 優、相松 隆、  
菊田 成、高山和浩、萩原剛良、橋本郁也、香林浩道、樽井 正、  
西森忠幸、増井保彦、笠井伸彦、松永浩司、岡 順二、松岡利行、  
豆成晋一、松村 一、中川 晚、中野龍介、中野健太郎、  
西辻正信、横山妙子、川崎通子、大黒静子
4. 本書の編集・執筆は米田が行なった。
5. 発掘調査の実施した遺跡、場所、期間については本文に掲載したとおりである。
6. 高安古墳群の発掘調査にあたっては、見学に来られた権原考古学研究所 堀田啓一、奥田 尚、大阪府教育委員会 山本 彰各氏より有益な御教示を得、奥田氏からは古墳の岩石種について御寄稿をいただいた。また高安城を探る会会員有志より多大なる御援助を頂いた。記して感謝します。

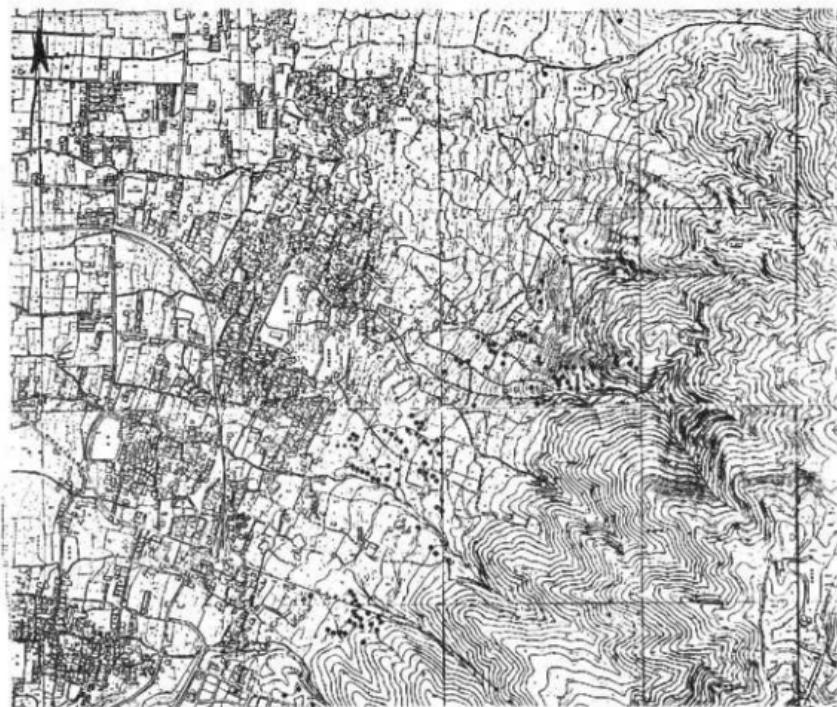
## 目　　次

1 高安古墳群発掘調査概要報告書 .....	1
2 史跡、心合寺山古墳試掘調査概要 .....	21
3 文化財保護法98条の2に基づく埋蔵文化財一覧 .....	23

# 高安古墳群発掘調査概要報告

## 第1章 はじめに

高安古墳群は、八尾市の東部、郡川・服部川・山畠を中心として分布する大群集墳で、標高488mの高安山山頂から、標高50mほどの上位扇状地に至るまで、高安山塊の西斜面に横穴式石室を主体とする後期古墳が多数営なまれている。それらは、石室の全長が15mにも達する大型のものから、3m以下の小型のものまで様々な形態のものがある。古墳群の主体は6世紀前半から後半にかけて爆発的に造営されたとされており、その概数は、『中河郡誌』(大正12年刊)によると540基にものぼるとされているが、実数はいまだ定かではない。しかし、現在までに古墳が多くが、植木畠による開墾と、石材採取の為に消滅したことはたしかで、現存する古墳も近い



第1図 高安古墳群分布図

Scal = 1/15000

将来に消滅の危機にさらされることになるかもしれない。

さて、高安古墳群の付近には、画像鏡が出土したことで有名な郡川西塚古墳や郡川東塚古墳といった前方後円墳が当古墳群の西の扇状地下位に位置しており、北方1kmには中河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳を中心として前期から後期の大型古墳が並ぶ大竹古墳群が存在する。また、古墳時代の玉作り遺跡として知られる水越遺跡や繩文、弥生、古墳時代の継続的な大集落である恩智遺跡、古墳時代の遺構・遺物が検出された郡川遺跡などの集落遺跡が高安山西麓の下位扇状地に営まれている。

高安古墳群の研究は、大正11年に岩本文一氏が古墳の概数を調査されたのをはじめとして地元郷土史家である清原得嚴氏や沢井浩三氏などによって幾度か踏査がなされてきた。なかでも昭和35年から37年にかけて分布調査を実施し、その結果を編年的に分析された白石太一郎氏の論考は、はじめて考古学の立場から当古墳群の実態を明らかにしたばかりでなく、群集墳研究(註-1)に新たな画期をもたらした点で重要な意義を持つものであった。その後、昭和41年、42年に大阪府教育委員会が当古墳群の分布調査及び実測、測量調査を実施して198基を確認しているが、簡単な概報が刊行されたにとどまっている。昭和48年・49年に中田遺跡調査会学生有志によつて実施された分布調査は、藤井克巳氏によって報告されているが、これが当古墳群の分布状況(註-2)をえた最新の分布図で、324基の古墳が確認されている。しかし全ての古墳数や古墳の位置を明確にしているとはいひ難い。当古墳群内の発掘調査としては、昭和55年に高安城範囲確認調査の一環として実施された高安山山頂に位置する2基の終末期古墳の調査が報告されているにすぎない。少なくとも6世紀代の古墳が主体といわれる高安古墳群の頂に、7世紀中頃に比定できる終末期古墳が位置することは、当古墳群の消長を考える上で興味深いものがある。

八尾市郡川に所在する法藏寺境内において墓地造成の計画がある為、境内の古墳の範囲を確認して保存をはかりたい旨、住職 氏よりの依頼があった。八尾市教育委員会では、古墳を現状のまま保存することを前提にして、地形測量及びトレンチ発掘調査による古墳範囲の確認調査を実施した。調査は昭和58年6月2日より着手し、昭和59年3月23日に終了した。

## 註記

註1 中河内郡役所編「中河内郡誌」東部高安村編1922

註2 白石太一郎「畿内大型群集墳に関する一試考」「古代学研究 第42・43合併号」1966

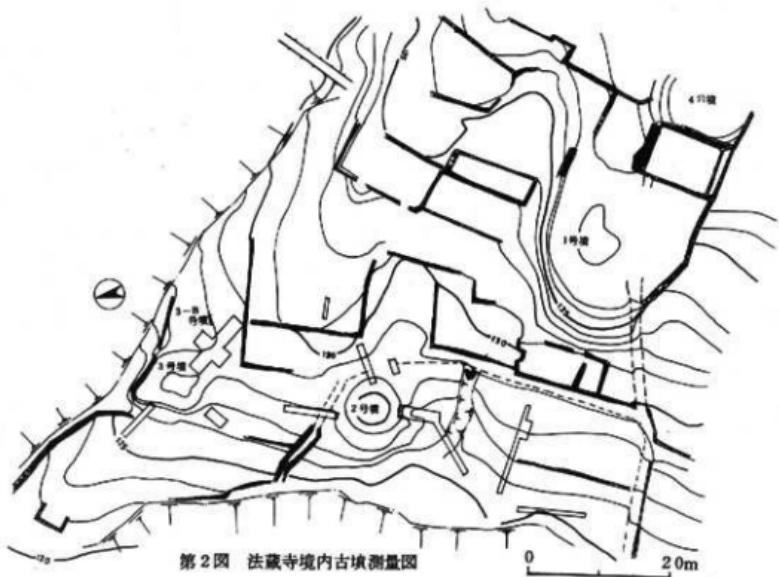
註3 大阪府教育委員会「八尾市高安千塚古墳群の調査」1968

註4 藤井克巳「高安古墳群分布調査概要報告」「『3,4合併号』佛教大学考古学研究会  
1977

註5 大阪府教育委員会「高安城範囲確認調査概要 I」1981

## 第2章 調査の概要

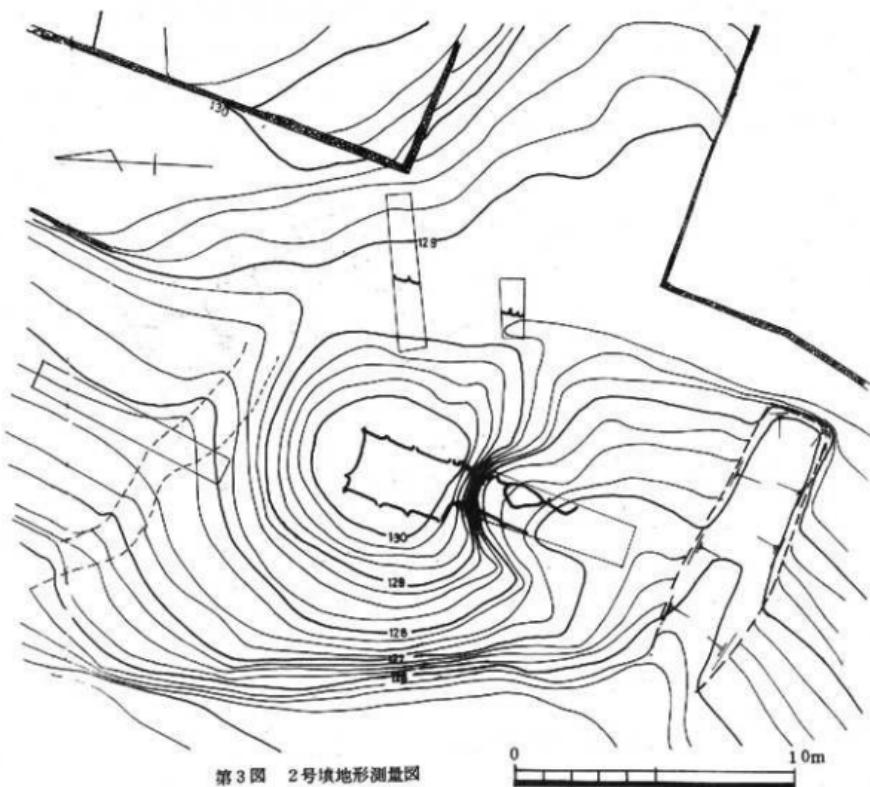
法藏寺境内で、調査前に古墳と確認できるものは4基のみであった。昭和41年の大阪府教育委員会の分布調査の概報では、「法藏寺境内においても消滅したものと合わせて9基を確認した」とされているが、現況の地表観察ではこれらを確認することはできない。古墳は、現存している4基のうち、墳径25mを測り、全長13mの横穴式石室を持つ通称開山塚とされるものが最大であり、山門前の坂を東へのぼりつめたところに所在する。この古墳を法藏寺境内1号墳と仮称しておく、この1号墳の北西下方に2基の古墳が存在しており、1号墳に近い方を2号墳、その北に位置する古墳を3号墳と仮称した。1号墳に接した東上方に、玄室が半壊した古墳があり、これを4号墳とする。今回の調査対象としたのは、墓地造成が計画されている2号墳、3号墳の周辺で、墳丘の範囲及び周辺における遺構の有無を確認する為、地形測量とトレントによる発掘調査を実施した。また2号墳については、当古墳群の性格を究明する目的で石室内の発掘も試みた。地形測量の結果、4号墳が位置する傾斜変換点から下方北西方向へならかな尾根が続いており、この尾根の南あるいは西側に上から4号墳、1号墳、2号墳、3号墳の順で、尾根の走行方向と同様、南東から北西方向に並んでいることがわかった。



## 2号墳

### 墳丘

1号墳の北西下40mに位置する古墳である。墳形は径14mを測る円墳と推定される。墳丘の高さは石室基底から測ると4.3mとなる。墳丘の西側は、後世の改変を受け崖状に切り立っているが墳頂の標高は130mで、標高126m付近の等高線まで墳丘に沿って弧を描いている。墳丘の東北側は、北西へのびるなだらかな尾根との間に谷状の窪みがみられ、これが墳丘の北側と南側へ続いている様子がわかる。これは、尾根の南西斜面に扇状の土取りを行なって墳丘を築成した為生じた人為的な地形であろうと思われる。調査は墳丘周間に4本のトレンチを設定した。墳丘東側に設定した2本のトレンチでは、周溝に当ると思われる部分に石組み遺構が存在していた。この遺構は、2段以上の石積ではなく直線的にのび、長さ5m以上は確認できるが遺



第3図 2号墳地形測量図

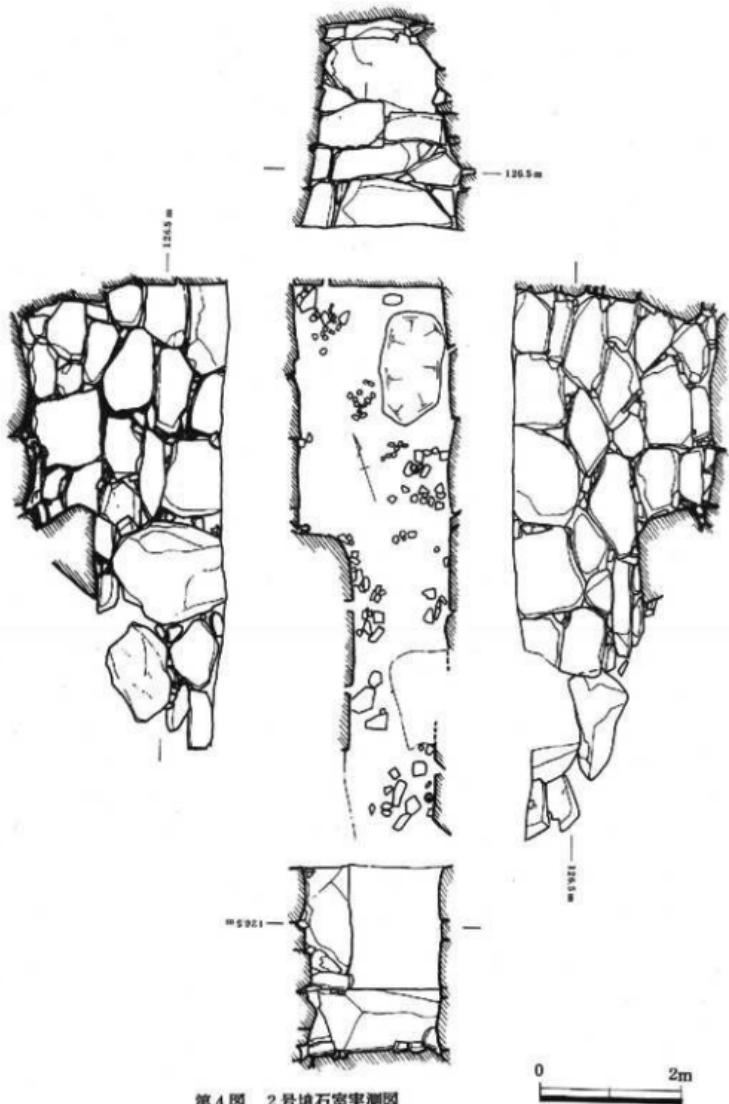
構の時期、性格は不明である。この遺構と墳丘の間は幅2.5m、深さ0.5m以上の掘り切りが存在するようであるが、古墳の周溝か後世のものかは確認できなかった。古墳の北側に設定したトレンチでは、墳丘裾の地山面が若干窪んでおり、ここに周溝の存在を想定できる。墳丘の南側には片袖式の横穴式石室が開口しており、羨道部の破壊の為崖状を呈している。

### 石室

羨道の末端を確認する為、石室の延長上に幅2mのトレンチを設定した。羨道は調査前の開口位置よりさらに南へのびており、石室全長は東側で7.5m、西側で6.5mを測ることを確認した。羨門部には閉塞石の最下部が存在していたが、ほとんど崩されており、羨門前面1mのところに閉塞石を抜きとったものと思われる約30cm大の石材の集積がみられた。羨道から玄室へ掘り進めていくと、羨道と玄室の一部に石棺材の破片が散乱しているのを確認した。同じ面で近世磁磚などを検出しているため、比較的新しい時期に盗掘を受けたものと思われる。床に敷かれた石材も多数存在するが、ほとんど攢乱された状況であった。これらをとり除くと、玄室の周縁に原位置を保っていると思われる床石がほんのわずか存在した。また羨道部から鉄釘が2個体出土しており、ここに木棺を追葬していることが判明した。遺物もほとんど持ち去られたものと思われるが、羨道閉塞部東側壁下から平瓶が1点、玄室南西隅の袖部下から須恵器蓋壺の中に小型壺を据えた状況で各1点ずつ出土した。これら鉄釘、須恵器、床石の残存等が出土する床面の標高は約125.7mである。石室の基底は床面下5cmにあり、固く締まって整地されている。この整地土内に人頭大の礫がめられており、当初床石であろうと考えていたが、この礫は、石室を構築する石材の基底に入り込むため、石室構築前の地固めに用いられたものであろうと思われる。石室の石組みは、玄室で5段、羨道で2~3段に積まれている。玄門部の見上げ石は1枚で、玄室の天井石は3枚を数える。玄室はわずかな持ち送りがみられ、床面幅2.2m、長さ3.2m、基底から天井石までの高さ2.9mを測る。羨道部は後世の破壊が著しく、玄門部以外の天井石は全て抜き取られ、東側壁の石材が一部羨道内に落ち込んでいる。羨道長は東壁で4.5m、西壁で3m、床面幅は羨門部で1.2m、玄門部で1.4m、高さは1.7mを測る。

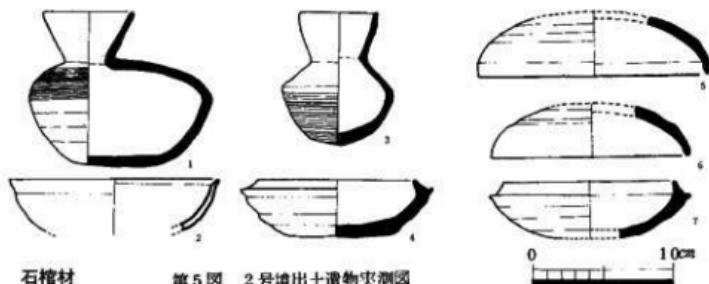
### 出土遺物

2号墳の石室から出土した遺物は、須恵器の蓋壺、平瓶、小型壺、土師器の壺及び鉄釘である。(1)は平瓶で、石室羨門東壁下で出土した。口縁部は外上方にのび端部はまるい。体部は丸味を持つが扁平で肩が張る。体部半面に回転カキメ、下半は回転ヘラケズリがみられる。色調は濃灰色を呈し、胎土は緻密である。(2)は土師器壺で、羨道玄門付近より出土した。口縁部は内寄して立ち上がり、端部は外反ぎみにおわる。口縁はていねいに横ナデされる。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良である。(3・4)は玄室袖部角下より出土した。(3)は小型壺で、球形の体部より直立し、内寄ぎみに開く口縁をもつ。器表に灰かぶりがみられる。(4)は須恵器壺蓋で、



第4图 2号填石室实测图

体部は平らな底部より丸みを持って立ち上がる。受部は外上方を向き、立ち上がりは内上方に短かくのびる。体部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。色調は濃灰色で胎土に砂粒を含む。(5~7)は、玄室西南付近の搅乱土内より出土したものである。(5・6)は蓋環の蓋で、まるい天井部より弯曲して下り口縁に至る。口縁端部はまるい。天井部は回転ヘラケズリで、以下は回転ナデ調整、色調は灰色で胎土は緻密である。(7)は蓋環の身で、形状は(4)と同様であるが、体部外面は、受部の下まで回転ヘラケズリがみられる。色調は灰色で胎土は緻密である。



石棺材

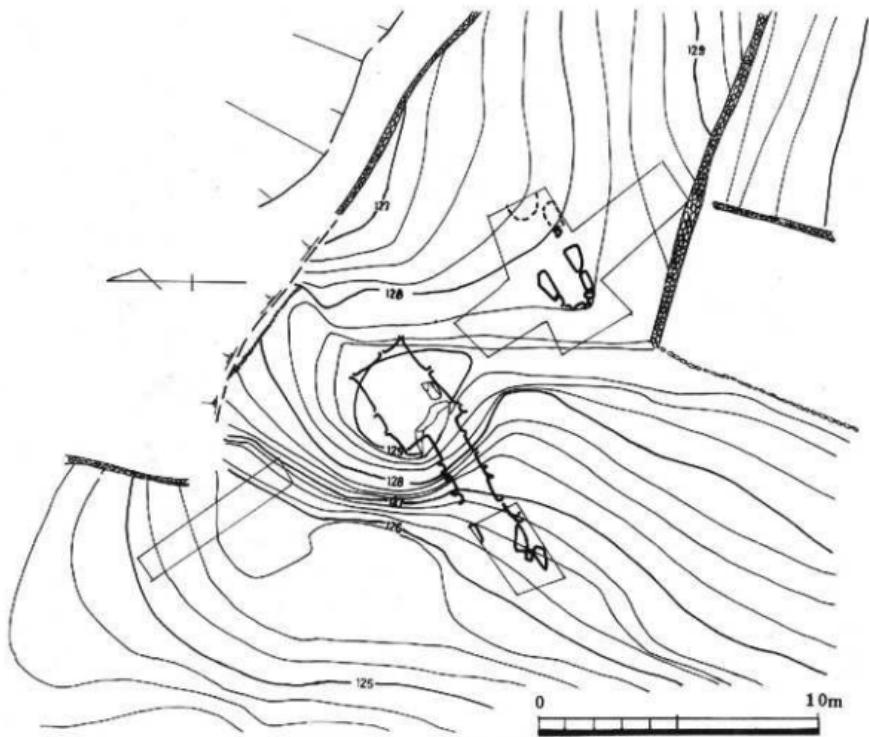
第5図 2号墳出土遺物実測図

組合せ式の家形石棺と推定される。厚いもので6.5cm、薄いもので4.5cmの厚みを持つ。底板と考えられる石材は厚みが6cmあり、幅6.5cmの切り込みがみられる。しかし、いずれも小片のみで、全体を復元することは困難である。

### 3号墳

#### 墳丘

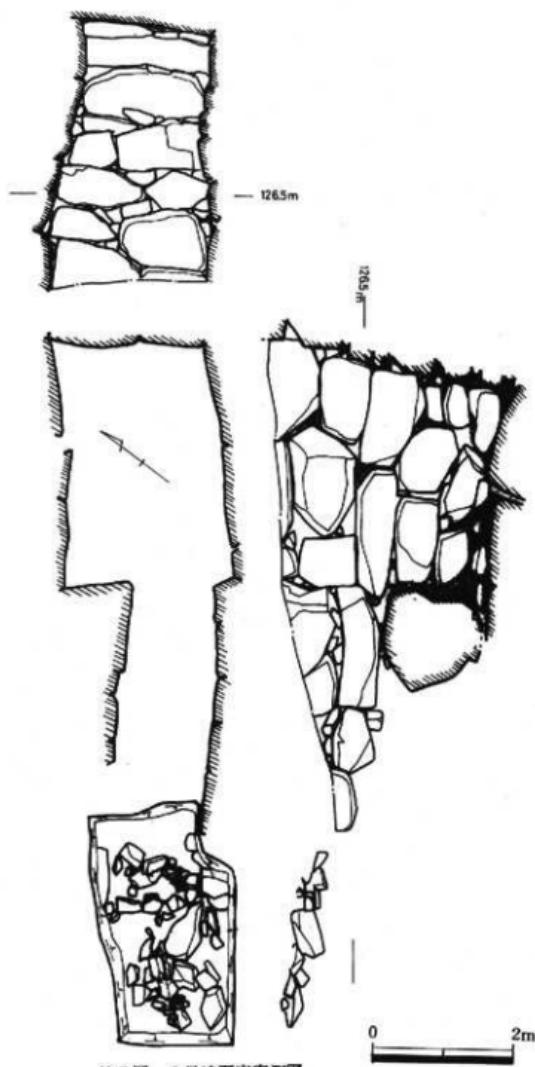
2号墳の北30mに位置する古墳で、墳頂で標高129.6mを測る。墳丘はかなり崩れていて、玄室と玄門部の大井石が露出している。また、北及び西側の墳裾は崖状を呈し、後世にかなり削られていることは確実で、東側も同様、植樹園や墓地の造成等によって、ほとんど旧状をとどめていない。しかし西側で、標高126mの等高線より傾斜が変わるが、標高125mの等高線まで弧を描いている。東側では、尾根との間に窪地状の地形が存在することから径15m、西側からの墳高4.6m以上の円墳を考えることができた。また、南東側の窪地に小型横穴式石室の破壊痕跡(3-B号墳)を検出したが、周溝の痕跡を確認することはできなかった。地形的には南東から北西へのびる尾根の稜線上に築成されている。その為、古墳の北東側は切り立った崖となるが南西側はなだらかである。両袖式の横穴式石室が南西に開口するが、石室内には小石材が散乱し漢道部の埋没は著しい。また北西側に設定したトレンチでは、墳外へ傾斜を持つ七層の堆積がみられた。



第6図 3号墳 3-B号墳地形測量図

### 石室

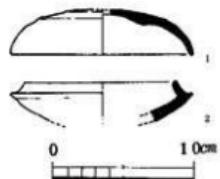
古墳の南西側のトレンチは、石室羨道末端を確認する目的で設定した。地表下40cmほど掘り下げると、現存羨端より1m以内の位置に羨道側壁下方に使用された石材を検出した。この羨道側壁は、東側で2.5m延長を検出したが、著しく損壊した状況であった。両壁の間は30cmから40cm大の石材がつまつておらず、羨門の閉塞に用いられたものであろうと考えられる。3号墳については羨道端を確認するにとどめたが、石室の略測を実施した。これらの結果、当古墳の石室は、全長9.7m、玄室長3.4m、玄室最大幅2.4m、玄室高は実測可能最大部分3.7mを測り、天井が極端に高い玄室となる。羨道長は、東壁で6.2m、羨道幅は羨門部で1.3m玄門部で1.2mを測り、東袖幅が28cm、西袖幅が95cmを測ることが判明した。現状の石室基底付近の標高は124.7mであり、墳頂との比高は5mである。羨門部擾乱土内からは、6世紀後半に比定できる須恵器片が出土している。



第7図 3号填石室実測図

## 出土遺物

図示できたのは(1・2)のみである。(1)は蓋壺の蓋で、丸い天井部より背曲して下り口縁に至る。口縁端部は丸い。天井部の $\frac{1}{3}$ は回転ヘラケズリ、以下は回転ナデである。(2)は蓋壺の身で、体部は浅く、受部は外上方を向く。内傾してのびる短かい立ち上がりを持つ。口縁端部はつまみ上げぎみにおわる。底部は復元不能である。いずれも須恵器で灰色を呈し胎土は緻密である。

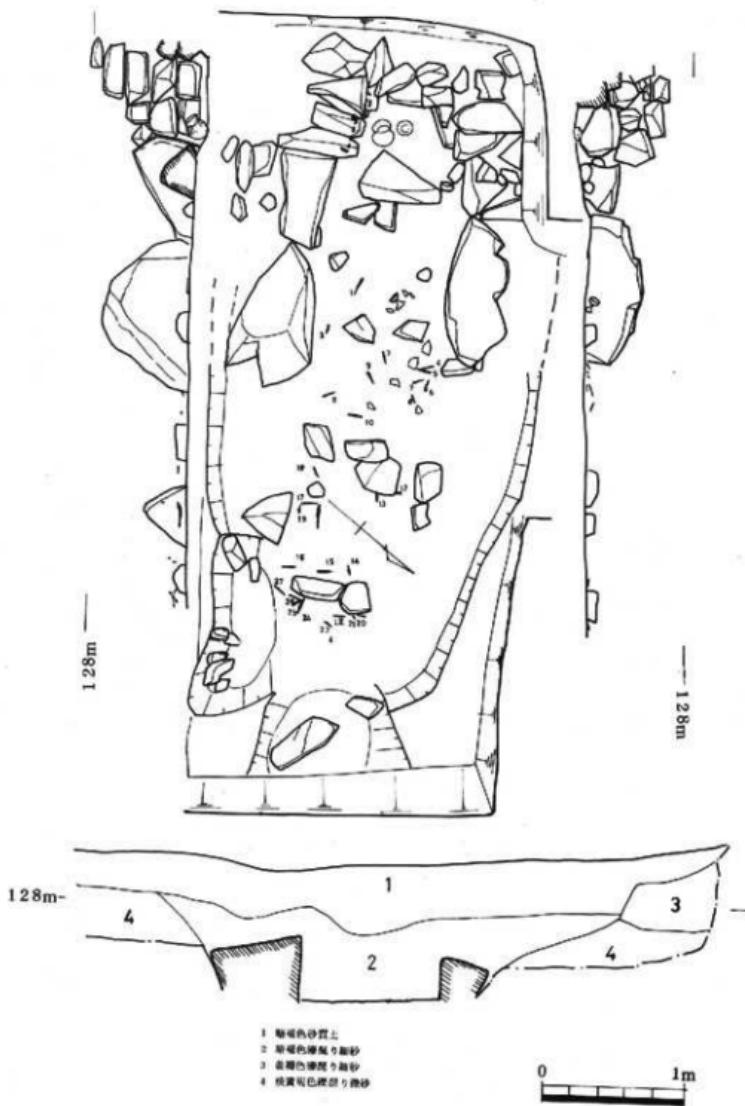


第8図 3号墳出土遺物実測図

## 3-B号墳

### 石室

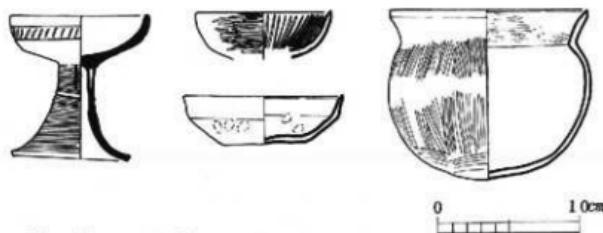
3号墳の東南墳丘裾で小型の横穴式石室を検出した。当初このトレンチは3号墳の墳丘北東裾を確認する目的で設定したが、周溝痕跡と思われた擾乱土を掘り下げるに横穴式石室基底の側石材を検出し、副葬品と思われる須恵器が出土した。このため調査区をトレンチに直交して両側に拡張し石室の検出につとめた。当古墳は地形的には3号墳と南東からのびる舌状尾根の狭間に築かれており、地形測量でも断面観察でも墳丘らしい痕跡は確認できなかった。しかし石室の形状は、いわゆる無袖式に属するもので、南西端で検出した閉塞石を羨門部、北東端で検出した窪みを奥壁基底の抜きとり穴と考えれば、全長4.5m、幅0.95mの石室となる。石室側壁は、羨門付近で積み方が変わっており、石室の主体が大型の割石の石材を並べているのに比べ、閉塞部より北80cm程度の間の側壁は、小型の扁平な石材を小口積みにしている。その境界にあたる部分に石室主軸に直交した長径50cmの石材を配置している。この石材と羨門閉塞石の間より土師器の壺と壺が置かれていた。また、石材の北東側は、木棺に使用されたと考えられる鉄釘が多数出土しており、意図的に石室内の空間を墓室と羨門部に区別していたように思われる。鉄釘の上面には10cmから30cm大の疊群が被っており、鉄釘や刀子は、この疊群をとりはずした面で検出できる。鉄釘は総数28個体で、墓室北東端と中央南西寄りに密集して出土しており、ここに小口が存在したと推定される。ほとんどの鉄釘と同じレベルで、棺床に用いられたと思われる小石材を検出した。これらは石室壁に沿って、2個ずつ組になって方形に配置されている。棺床と鉄釘の配置より木棺の形状を復元すると、幅60~70cm、長さ200cm程度の大きさとなる。木棺の南側で検出した須恵器高壺は、原位置を移動しているものと思われるが、同地点付近より出土した須恵器、土師器の破片などから、墓室の南西小口外側に土器類を副葬していたことになる。棺内北東寄り、南東側壁に近い位置から、刀子1点が切先を南西に向けて出土している。石室床面の標高は、127.3mである。



第9図 3-B号填石室実測図

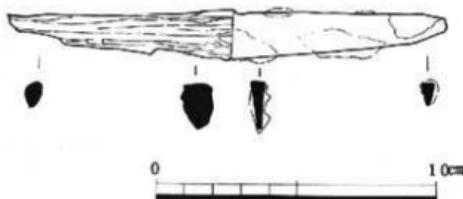
## 出土遺物

土器：(1)は須恵器高坏で、木棺南西小口外側で出土した。坏部は底部より彎曲して立ちあがり、直立して口縁に至る。底部と口縁部の境に2本の凹線をめぐらし、間にキザミを入れて文様帶をつくる。脚は、垂直な脚柱部よりラッパ状に開き脚端部に至る。端部は外傾する平坦面となる。脚柱部中位の2本の沈線によって二段に区画し、上段にヘラ切りによる透しを2方に配する。坏部及び脚部内面は回転ナデ、脚部外面は細かい回転カキメをほどこす。色調は淡黄色で胎土は緻密である。(2)も木棺南小口付近で破片となって出土した土師器坏である。半球形の体部より直立して口縁に至る。口縁端部は丸い。内面に放射状暗文を付し、外面は不整方向のヘラミガキでていねいに磨き上げている。色調は赤褐色で胎土はきわめて精良である。(3・4)は狭門付近に並べ置かれてあったものである。土師器坏(3)は平坦な底部よりたち上がり直立する口縁を持つ。口縁端部は外へつまみぎみに横ナデし、他は内・外面ユビナデで調整してある。色調は赤褐色で胎土は精良である。土師器壺(4)は、直立して外反する口縁と球形の体部を持つ。外面は縦方向のハケ調整がみられる。色調は淡黄褐色で胎土は精良である。



第10図 3-B号墳出土土器実測図

刀子：切先は欠損するが、ほぼ完形に近い。柄の部分は木質が良好に残存する為、刀身との境は明瞭である。柄は上部が平坦であるが、腹部はまるい。刀身は関より切先に向かって幅を減じる。全長は15.5cm、刀身7.6cm、柄の長さ7.9cm、刀身最大幅1.7cm、刀身の背部は平坦で、厚みは4~5cm、柄の厚みは現存最大1.0cmを測る。

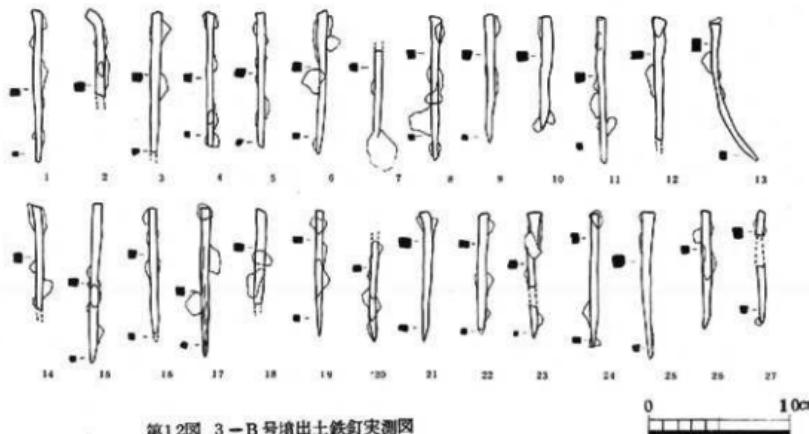


第11図 3-B号墳出土刀子実測図

鉄釘：統計28本出土した。うち1点は風化が著しくとり上げ不能であった。これらはほとんど木棺の原位置からの出土と考えられ、遺存状況も良好である。長さは12.3cmのものから7.9cmのものまであるが、10cm以上と9.5cm以下に大きく区分できる。断面は頭部より先端部まで方形を呈している。

番号	現存長 (mm)	断面 (mm)	重量(g)	備 考	番号	現存長 (mm)	断面 (mm)	重量(g)	備 考
1	107	5×4	13.0	完 形	15	123	7×5	16.0	完 形
2	60	6×5	9.0	先端欠損	16	90	5×4	14.0	先端欠損
3	100	7×5	17.0	先端欠損	17	107	5×5	19.0	完形・木質残存
4	95	5×4	11.0	完 形	18	68	6×5	12.0	先端欠損
5	95	5×4	12.0	完 形	19	90	6×4	11.0	完 形
6	100	5×5	15.0	完 形	20	70	5×3	9.0	頭部欠損
7	70	5×4	12.0	頭部欠損	21	93	7×6	13.0	完 形
8	102	6×5	16.0	完 形	22	84	6×4	13.0	先端欠損
9	90	6×6	11.0	完 形	23	—	5×5	11.0	中間欠損
10	7.9	6×5	11.0	完 形	24	9.5	5×4	7.5	完 形
11	104	6×5	16.0	完 形	25	104	8×7	12.0	完 形
12	88	7×5	12.0	先端欠損	26	84	4×4	10.5	完 形
13	105	8×5	16.0	完形歪曲する	27	—	6×6	4.8	中間欠損
14	75	6×6	14.0	先端欠損					

鉄釘計測表



第12図 3-B号墳出土鐵釘実測図

## 第3章 石材の岩石種について

### 2号墳の石材

2号墳には石室に使用されている石材と石棺に使用されたと推定される石材とがある。石室内に使用されている石材の岩石種は花崗岩類であり、石棺に使用されていた可能性のある石材の岩石種は凝灰岩である。

#### I 石室の石材

2号墳の石室に使用されている石材は、角が僅かに円くなった亜角礫であり、加工痕が見られない。表面は水磨を受けたようにややなめらかである場合が多い。使用岩石種は観察される限りに於て、大半が弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩で、2石のみが角閃石閃綠岩である。石室内の敷石、側壁に使用されている小石材については付着物もあり、観察条件が悪いため、観察を行っていない。

**角閃石閃綠岩**：色は灰黒色である。造岩鉱物は細粒で、長石、角閃石である。長石は白色で、粒径が $0.5\text{mm} \sim 1.5\text{mm}$ であり、量が僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒径が $0.5\text{mm} \sim 1.5\text{mm}$ である。量は多い。

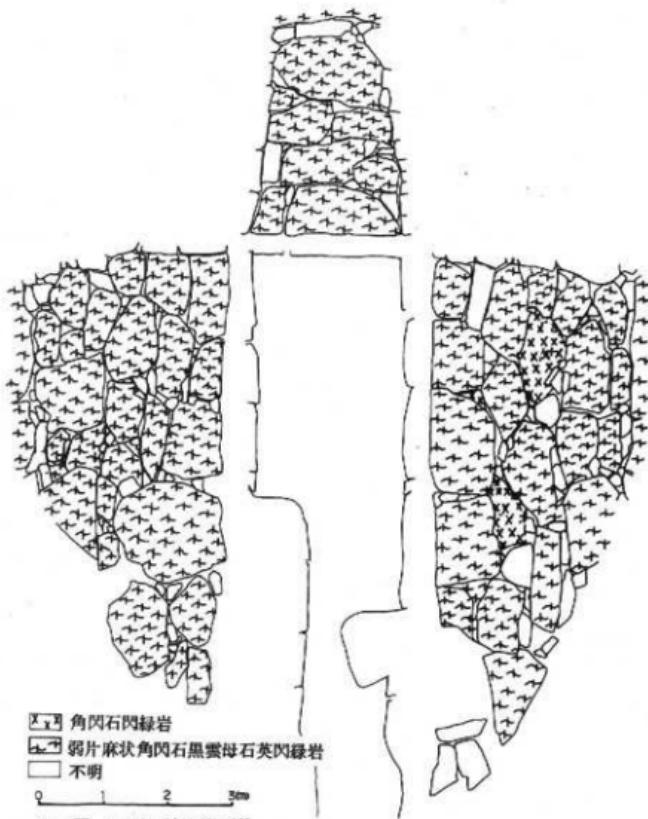
**弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩**：色は暗灰色～灰黒色である。僅かに片麻状構造が見られる。長石の斑晶が片麻状構造の方向に並ぶ。斑晶は粒径が $3\text{mm} \sim 7\text{mm}$ で、量が多い。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明で、粒状である。粒径は $1\text{mm} \sim 3\text{mm}$ で、量がごく僅かである。斑晶以外の長石は白色で、粒径が $0.5\text{mm} \sim 2\text{mm}$ である。量は多い。黒雲母は黒色板状である。粒径が $0.5\text{mm} \sim 1.5\text{mm}$ で、量がごく僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒径が $1\text{mm} \sim 1.5\text{mm}$ である。量は僅かである。

石室に使用されている岩石種と同質の岩石は、当古墳東方の高安山山腹の谷川等に見られる弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩、角閃石閃綠岩である。使用石材は亜角礫であり、表面は媒乱されず、ややつるつるしていることから、谷川の転石であると推定される。当古墳上方の植木畠から山林にさしかかる付近上方の谷川に、同岩石種で、同岩相の亜角礫が見られる。この付近が石材の採取地と推定される。また、大半の石材が同じ岩石種で、同質で、礫形がほぼ同じであることから、ほぼ同じ地点で、石室に使用する石材を採取したと推定される。

#### II 石棺材の可能性がある石材

石室内の擾乱土中から、数個の石棺材の可能性がある岩石が採取された。岩石には加工痕が見られる。岩石種は流紋岩質火山礫凝灰岩である。

**流紋岩質火山礫凝灰岩**：色は白色である。構成礫種は松脂岩、流紋岩である。松脂岩礫は黒



第13図 2号墳石室の岩石種

色で、角礫である。最大粒径は5mmで、量が僅かである。流紋岩礫は灰色～暗灰色で、角礫である。最大粒径は30mmに及び、量は中である。砂粒は流紋岩が多く、松脂岩、軽石、長石が僅かである。基質は灰色～灰白色緻密で、柔らかい。

流紋岩質火山礫凝灰岩と同じ岩相を示す岩石は奈良県香芝町田尻峠北方付近に分布する流紋岩質火山礫凝灰岩の岩相の一部に見られる。この付近には古代に石材が切り出されたと推定される石切場跡がある。

〔註1〕

当古墳近くの法藏寺には石棺片と推定される板状の石材が1石ある。この石材は周囲がかなり磨滅して円くなり、加工痕が見られないが、長側板の可能性がある。岩石種は流紋岩質凝灰

角礫石である。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は白色である。構成礫種は松脂岩、軽石である。松脂岩礫は黒色の場合と灰色～淡茶褐色の場合がある。黒色の松脂岩礫は角礫である。礫径は7mm～30mmのものが多く、稀に7cmに及ぶものもある。灰色～淡茶褐色の松脂岩礫は、礫径が7mm～1.5cmで、ごく僅かである。軽石礫は白色の亜角礫である。礫径は7mm～2cmで、量が僅かである。基質は白色で、緻密で柔らかい。

この岩石と同じ岩相の岩石は二上山西方牡丹洞付近に分布する流紋岩質凝灰角礫岩の岩相の一部である。

この石棺材と推定される岩石は、法藏寺近くのいすこかの古墳に石棺として使用されていたものであろう。高安古墳群の古墳の中に石棺が見られる例は非常に少ない。来迎寺北方古墳では小形の持抜式家形石棺が見られ、高安89号墳、高安103号墳では玄室内に石棺材と推定される石材が見られる。これらはいずれも白色の流紋岩質火山礫凝灰岩であり、石材の採石地はドンズルボー付近であると推定される。また、服部川の八幡神社横には石棺材と推定される石材が<sup>(註2)</sup>ある。この石材の岩石種は流紋岩質溶結凝灰岩であり、石材の採石地は播磨国であると推定される。高安古墳群内の古墳に使用されている石棺材の採取地は、大和と河内を境するドンズルボー付近と播磨国の2地域が予測され、今後、古墳の調査が進むにつれて、石棺石材の使用傾向が明らかになるであろう。

### 3-B号墳石室の石材

石室の一部の石材のみが残っている。この石材は比較的小さい石が使用されている。石材には石室築造時と推定される加工痕が見られず、形は角が僅かに円くなった角礫である。石材の表面は媒乱されず、ややなめらかで、水磨されたような様相である。使用石材の岩石種は黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩、角閃石閃綠岩、黒雲母安山岩、弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩である。比較的大きな石材の岩石種は角閃石閃綠岩であり、弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩は比較的石材が小さく、数が多い。

黒雲母花崗岩：細粒と中粒の二種類がある。便宜上、中粒の岩石を黒雲母花崗岩A、細粒の岩石を黒雲母花崗岩Bとする。

黒雲母花崗岩A：色は灰色で、かすかに片麻状構造が見られる。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で、粒状である。粒径は2mm～3mmで、量が多い。長石は白色粒状で、粒径が1.5mm～5mmである。量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が1mm～2mmである。量は僅かである。

黒雲母花崗岩B：色は灰色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明で粒状である。粒径は0.5mm～1mmで、量が僅かである。長石は白色で粒状である。粒径は1mm

～2 mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状である。粒径は0.5 mmで、量がごく僅かである。

**斑状黒雲母花崗岩**：色は灰色～暗灰色である。粒径が10 mm～25 mmで、点在する斑晶の長石が見られる。色は灰白色である。造岩鉱物は石英、黒雲母である。石英は無色透明で、粒状である。粒径は1 mm～3 mmで、量が多い。長石は白色で粒状である。粒径は1 mm～2 mmで、量が多い。黒雲母は黒色で板状である。粒径は1 mm～1.5 mmで、量が僅かである。

**角閃石閃綠岩**：細粒と中粒の二種類がある。便宜上、細粒の岩石を角閃石閃綠岩A、中粒の岩石を角閃石閃綠岩Bとする。

**角閃石閃綠岩A**：色は暗灰色である。造岩鉱物は細粒で、長石、角閃石である。長石は白色粒状で、粒径が1 mmである。量は多い。角閃石は黒色粒状で、粒径が1 mmである。量は僅かである。

**角閃石閃綠岩B**：色は灰黑色である。造岩鉱物は中粒で、長石、角閃石である。長石は白色粒状である。粒径は0.5 mm～1 mmで、量が僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒径が0.5 mm～2 mmである。量は多い。

**黒雲母安山岩**：色は赤褐色で、表面がなめらかである。造岩鉱物は長石、黒雲母である。長石は白色で、自形である。粒径は1 mmで、量が僅かである。黒雲母は黒色板状で、六角形の自形である。粒径は1 mmで、量が僅かである。石基は赤褐色緻密で固い。

**弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩**：色は灰色～暗灰色である。暗緑色～緑黒色のレンズ状をなす変輝綠岩質の捕獲岩が散在する。レンズの長軸方向と弱い片麻状構造の方向とはほぼ調和する。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明で粒状である。粒径は1.5 mm～2 mmで、量がごく僅かである。長石は白色で粒状である。粒径は1.5 mm～3 mmで、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が2 mm～3 mmである。量は僅かである。角閃石は黒色粒状で、粒径が2 mm～5 mmである。量は中程度である。

黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩、角閃石閃綠岩、弱片麻状角閃石黒雲母石英閃綠岩の



第14図 3-B号塊石室の岩石種

岩相と同じ岩石は、この古墳東方の高安山中腹に分布する岩石である。石材の形は亜角礫であり、表面は媒乱されず、水磨されたようにややなめらかであることから、石室に使用されている石材は谷川に転がる礫であると推定される。当古墳東方の植木畠から山林にかかる付近の谷川には、同岩石種で同岩相の亜角礫が見られる。この付近で石材に使用した岩石を採取したと推定される。黒雲母安山岩と同質の岩石は高安山付近では、ほぼ南北の走向で貫入した岩脈の岩石と推定される。高山西側の斜面にも分布する可能性がある。

#### (註)

- 註1 奥田尚・増田一裕「古代の石切場跡—その2——ドンズルボー付近」(『古代学研究』第95号1981)
- 註2 奥田尚「中河内の古墳の石棺材」(『古代学研究』第97号1982)

#### 第4章 まとめ

今回の調査は、古墳の範囲を確認することを目的とした調査ではあったが、今まで調査される機会の少なかった狭義の高安古墳群の中では初めての正式な発掘調査であるといえる。このことが、畿内最大規模の大型群集墳を究明する糸口にでもなれば、本調査の持つ学術的意義も大きくなろう。2号墳・3号墳は当古墳群の中では中規模な古墳である。築造時期は、3号墳については決め手を欠くが、2号墳は6世紀後半を瀬らない時期が考えられる。従来、当古墳群の時期を知る手がかりとして用いられた横穴式石室の形態的編年は、古墳群全体についての巨視的な捉え方はできるものの、支群単位の細部の分析を行なうには困難な問題があり、発掘調査による遺構・遺物の検討の積重ねにより年代序列を行なうことが精緻な分析を行なう上で最良の方法であることはいうまでもない。地理的にみても、法藏寺境内の1~4号墳は、高安古墳群の中の一つの独立した単位支群として捉えることができる。当支群の形成過程や性格を解明するには、全ての古墳を調査する必要があろうが、2号墳と3-B号墳の全容と3号墳の一部の状況を確認できたことは、今後の高安古墳群を研究するにあたっての基礎的な資料となるものであろう。特に3-B号墳については、上部構造がほとんど破壊されていたにもかかわらず、遺物が良好に残存し、木棺の配置と形状を復元することができた。この古墳は、3号墳の墳裾に盛土をほとんど行なわず、3号墳と主軸を合わせて築成しており、3号墳の被葬者ときわめて親縁な関係にあるものと推定される。いずれにせよ6世紀後半に盛行するといわれていた高安古墳群の中に、無袖式の終末期に属する古墳が存在することは、高安古墳群の中にも墳丘を持たない新しい古墳がいくつか存在する可能性をものがたっており、7世紀代に盛行する高安山山頂古墳群や平尾山千塚古墳群との関連を考える上で興味深い事実を示している。

# 史跡、心合寺山古墳試掘調査概要

## 1. 調査経過

心合寺山古墳は八尾市大字大竹所在の南面する前方後円墳である。墳丘の全長は130mを測り、後円部に比し前方部が長い形状を持つ。高安山西麓の扇状地低位に位置している為、西側からみると墳丘が高く見えるが、東側の側面観は低平である。時期は、古墳時代中期とされている。当古墳は昭和41年2月25日に史跡に指定されているが現況は、墳丘部の外、西と東に溜池があり、南に老人ホーム、北に田地があるが、この範囲は、当古墳の周濠にあたると推定されている。

昭和58年12月14日付で、八尾市下水道部河川課より、史跡の現状変更等の許可申請書が文化庁長官宛に提出された。申請箇所は墳丘東側の総池と称される溜池の北東部で、当古墳の外堤にあたる可能性のある箇所である。この部分は、堤防崩壊の危険がある為、護岸工事を実施したい旨の内容である。これに対する文化庁からの回答書、昭和59年1月24日付委保第4の1102号により、八尾市教育委員会において、試掘調査を実施することとなった。試掘調査の方法は、護岸工事計画箇所に幅1m、長さ3mのトレンチを3ヶ所設定し、工事予定基面まで手掘りによる掘削を実施した。調査期間は、昭和59年2月20日より同2月22日まで、調査にあたっては、昭和58年度八尾南遺跡他市内遺跡緊急発掘調査国庫補助金の一部を使用した他、八尾市下水道部河川課の協力を得た。

## 2. 調査の概要

トレンチの設定位置は、工事が計画されている部分のうちで総池の北岸にAトレンチ、北東岸にBトレンチ、東岸にCトレンチを設定した。以下各トレンチの概要を記す。

**Aトレンチ**：堤防工より1.8mの深さまで掘削した。トレンチ内の土層は7層に分層できる。1・2・3層は、流れ込みによる土層の堆積を示し、旧状をとどめていない事を示す。1層及び3層に遺物が若干含まれており、埴輪片、黒色土器片、須恵器片、弥生式土器の底部及び土師器高环の脚柱部が出土した。4・5・6・7層は、水平堆積を示す安定した土層で、遺物はほとんど出土しない。なお、葺石、円筒埴輪列等の古墳に伴う遺構の存在は確認できなかった。

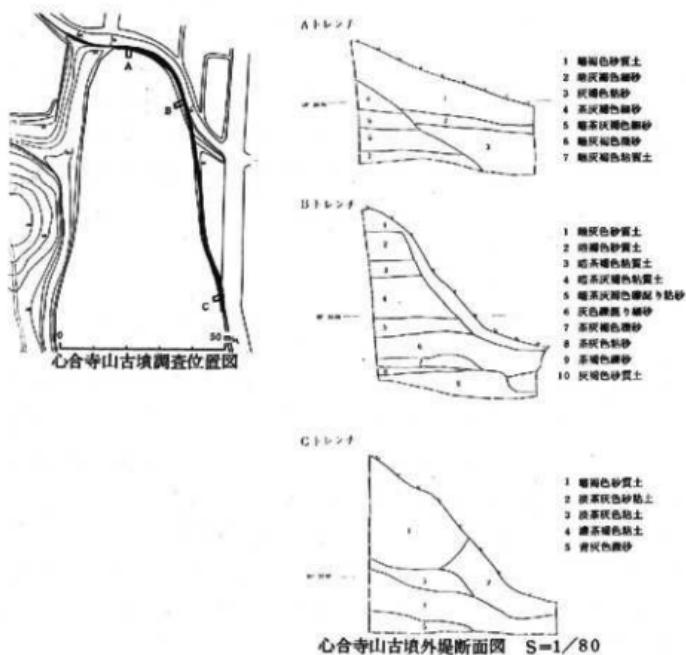
**Bトレンチ**：外堤上より2.5mの深さまで掘削を実施した。トレンチ内の土層は、1～5層までは水平な堆積をしているが6層は西側で池の方へ落ち込み、10層が堆積している。この層からは、多数の須恵器、土師器片を検出しており古墳時代の遺物包含層であろうと考えられ

る。時期的には当古墳よりは新しい年代を推定できる。7・8層にもわずかに土器片が含まれているが9層にはほとんどみられない。葺石、円筒埴輪列、埴輪片等の古墳に伴う遺構・遺物はほとんど確認できない。

Cトレンチ：外堤上より2.5mの深さまで掘削を実施した。トレンチ内の土層は1～5層まで西へ傾斜した堆積を示し、二次的な流入土であることを示している。なお、このトレンチにおいては、遺構・遺物をほとんど検出することができなかった。

### 3. まとめ

今回調査した範囲においては、明確に、古墳の外堤にあたると思われる遺構は確認できなかつたが、葺石や円筒埴輪列が外堤に存在しなかったとは言い切れない。現在外堤に沿ってわずかに石垣が存在しているが、これらは、外堤の葺石を転用していると考えられる。また、鏡池の外周には、埴輪片が多く散布していることから、外堤に円筒埴輪列が存在していたことも確実であろうと思われる。



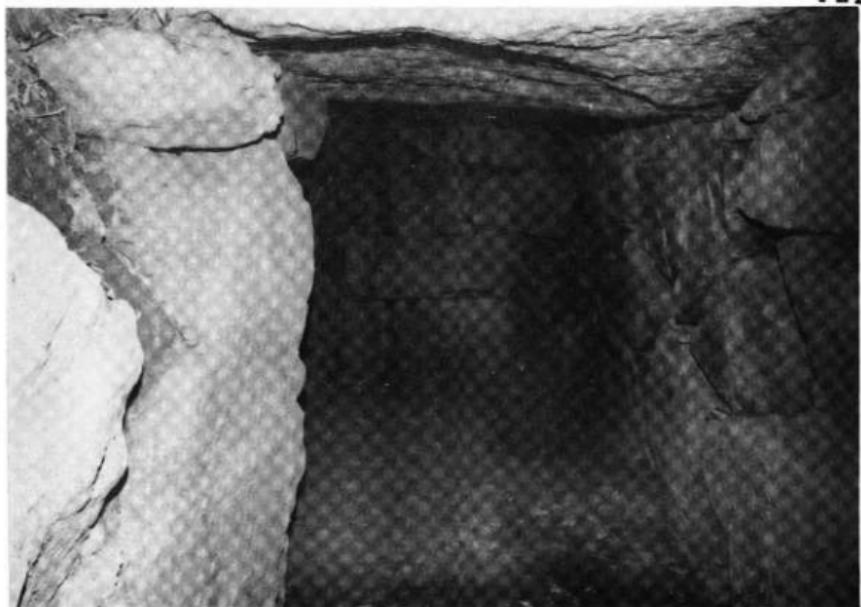


2号墳 調査前全景

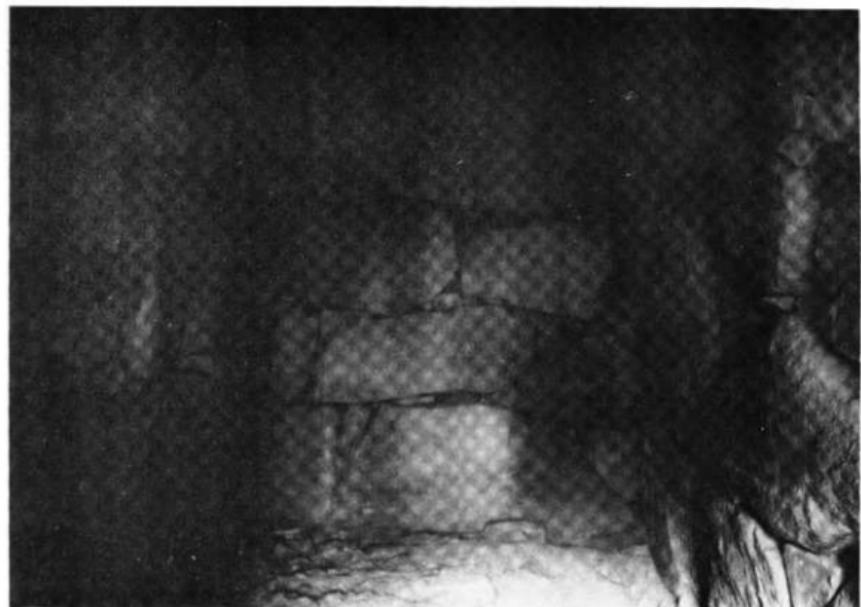


2号墳 石室調査後全景

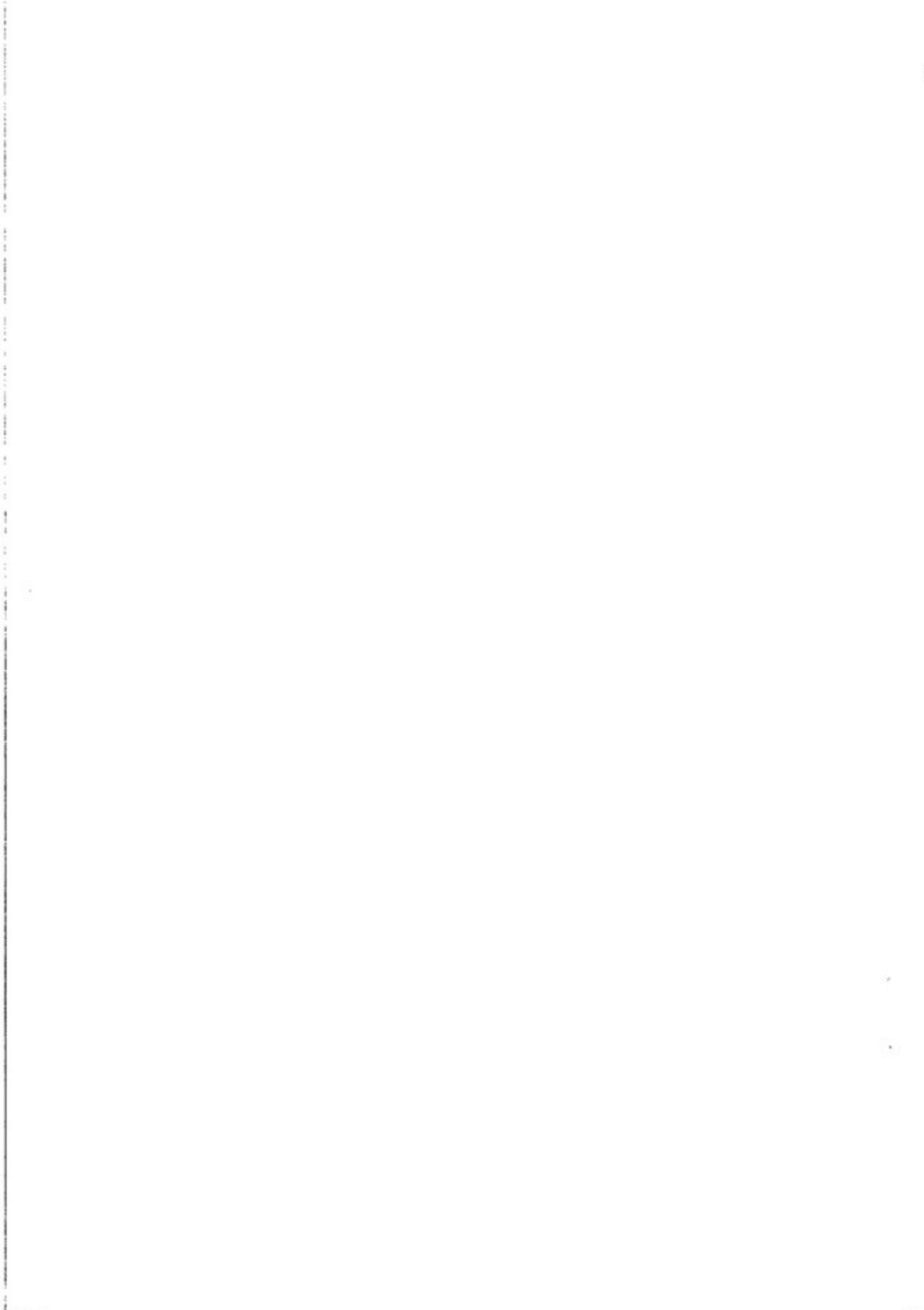


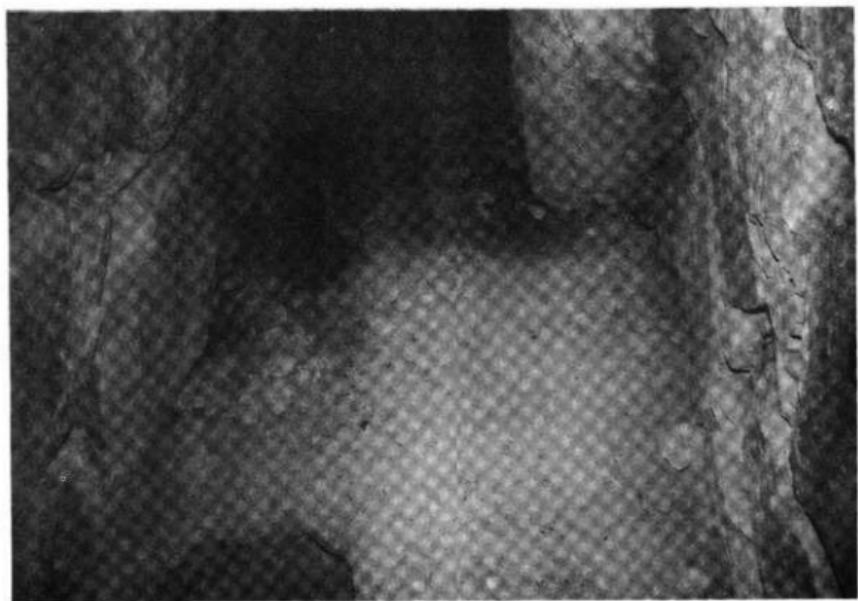


2号墳 石室玄門部



2号墳 石室玄室内

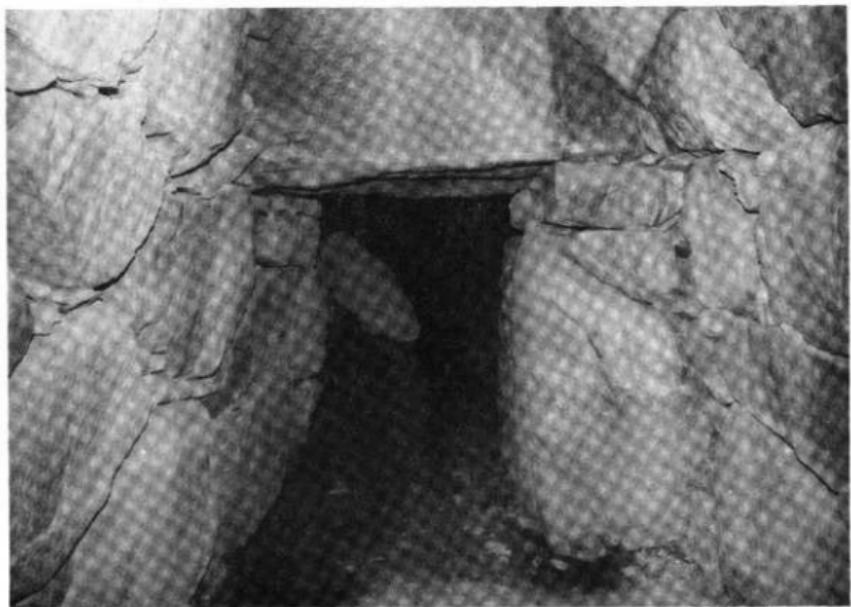




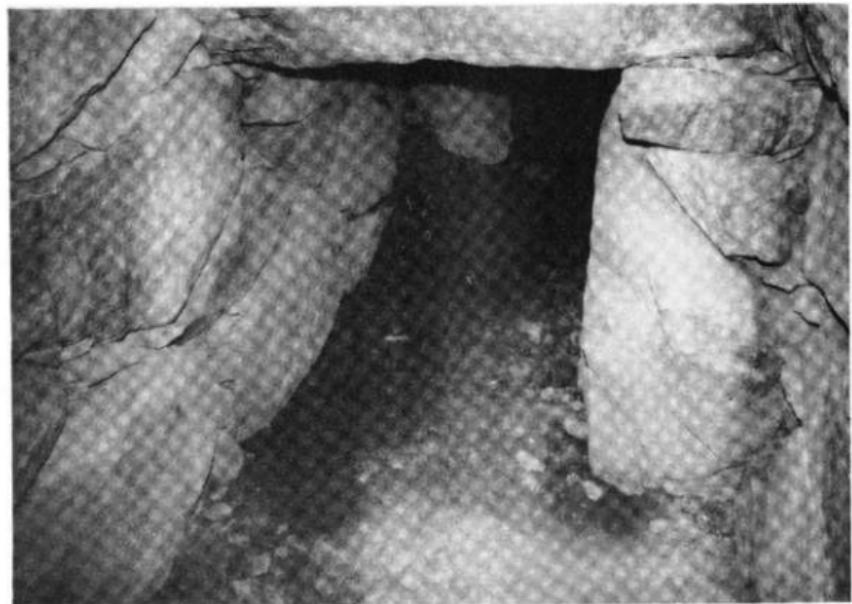
2号墳 石室玄門狭道





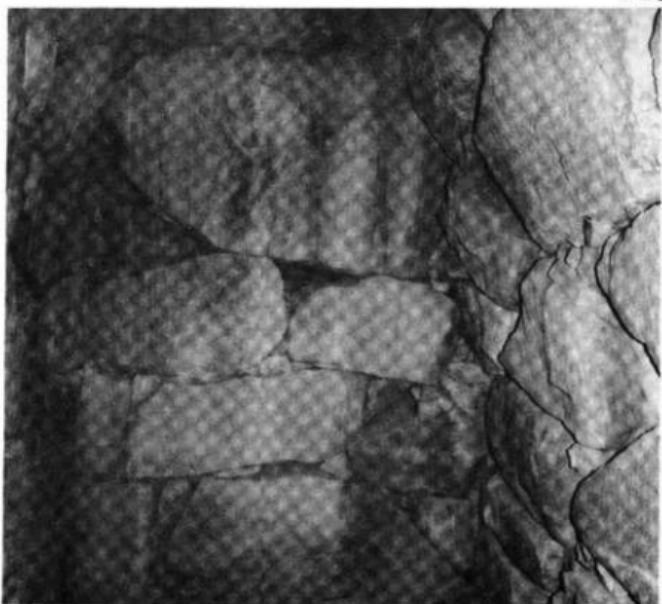


2号墳 石室床面状況



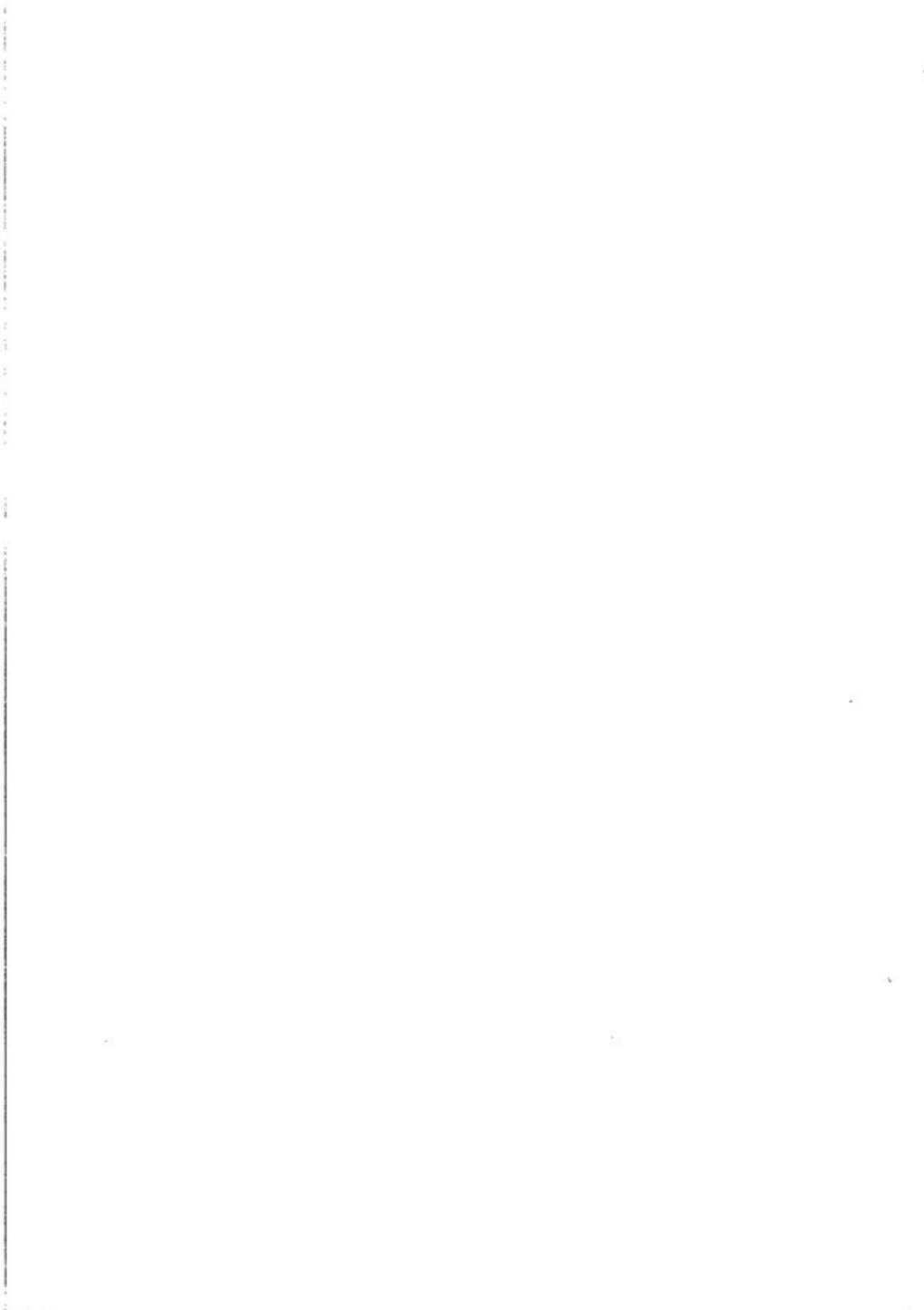
同上





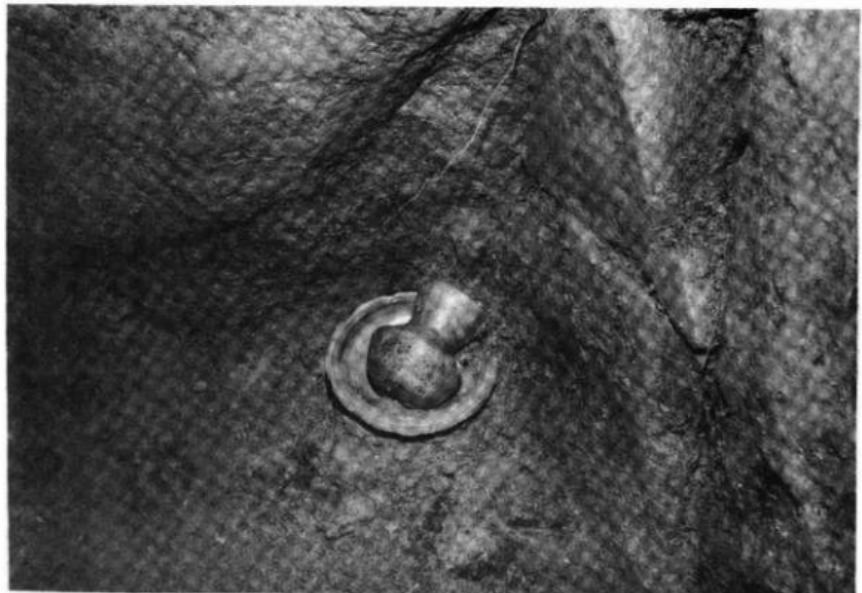
2号墳 石室奥壁



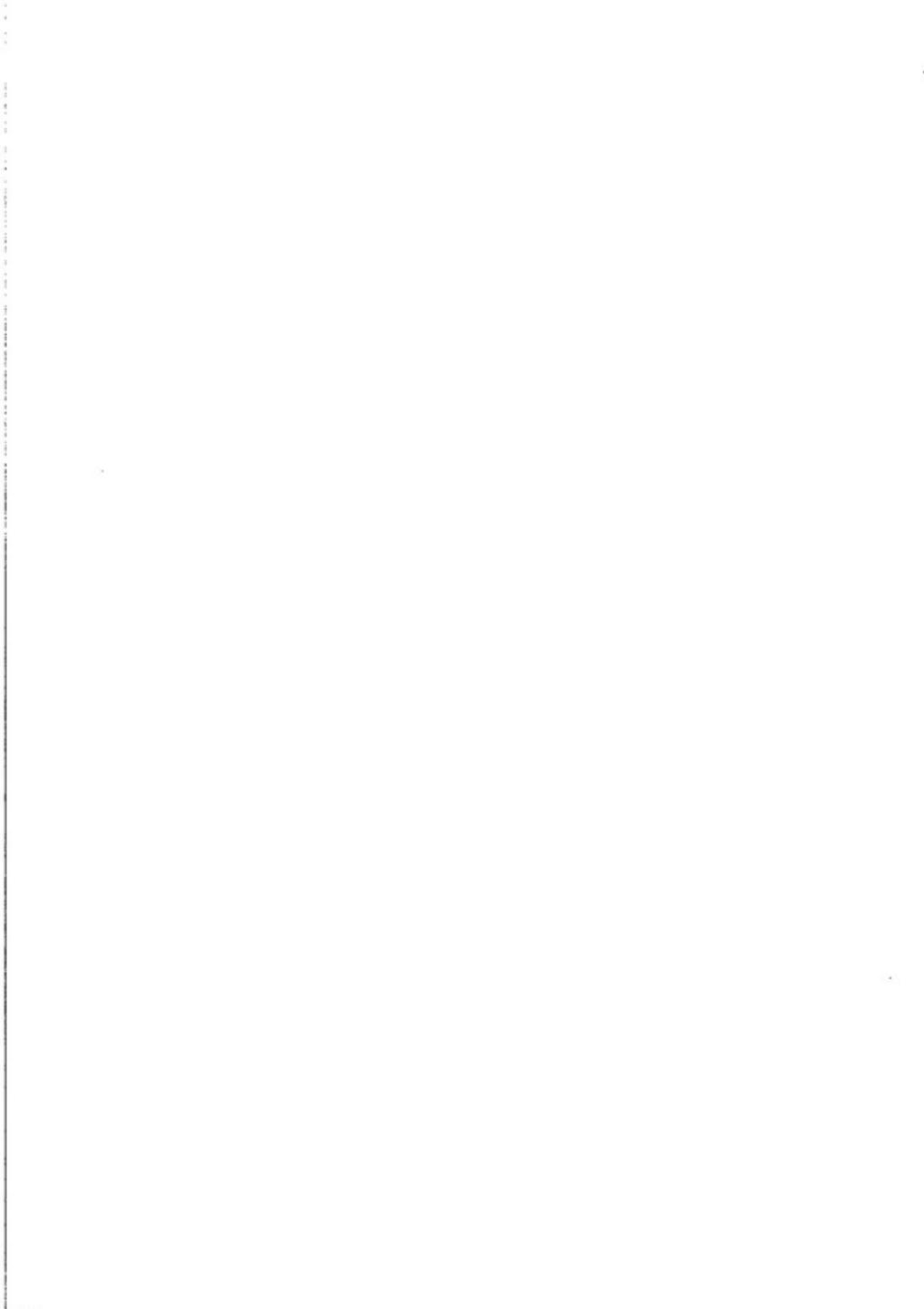




2号墳 羨道部遺物検出状況

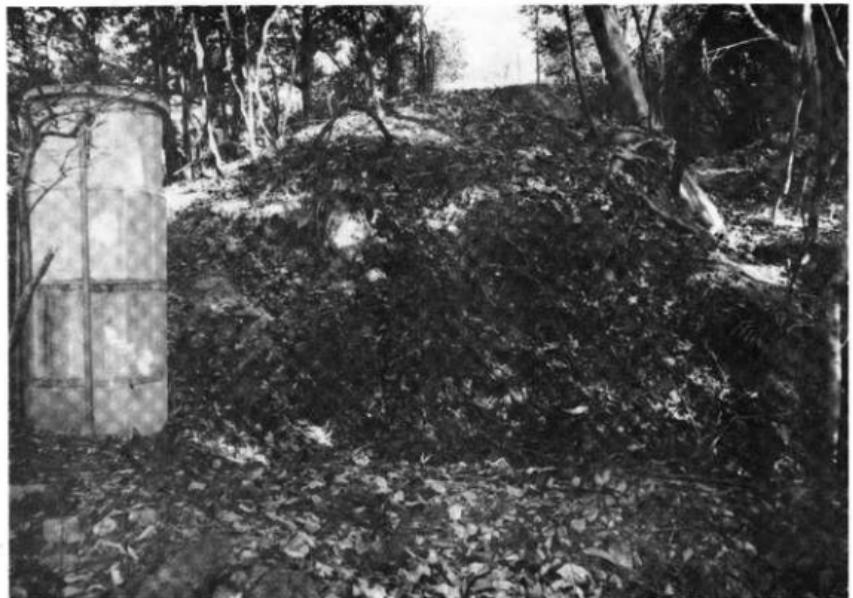


2号墳 玄室内遺物検出状況

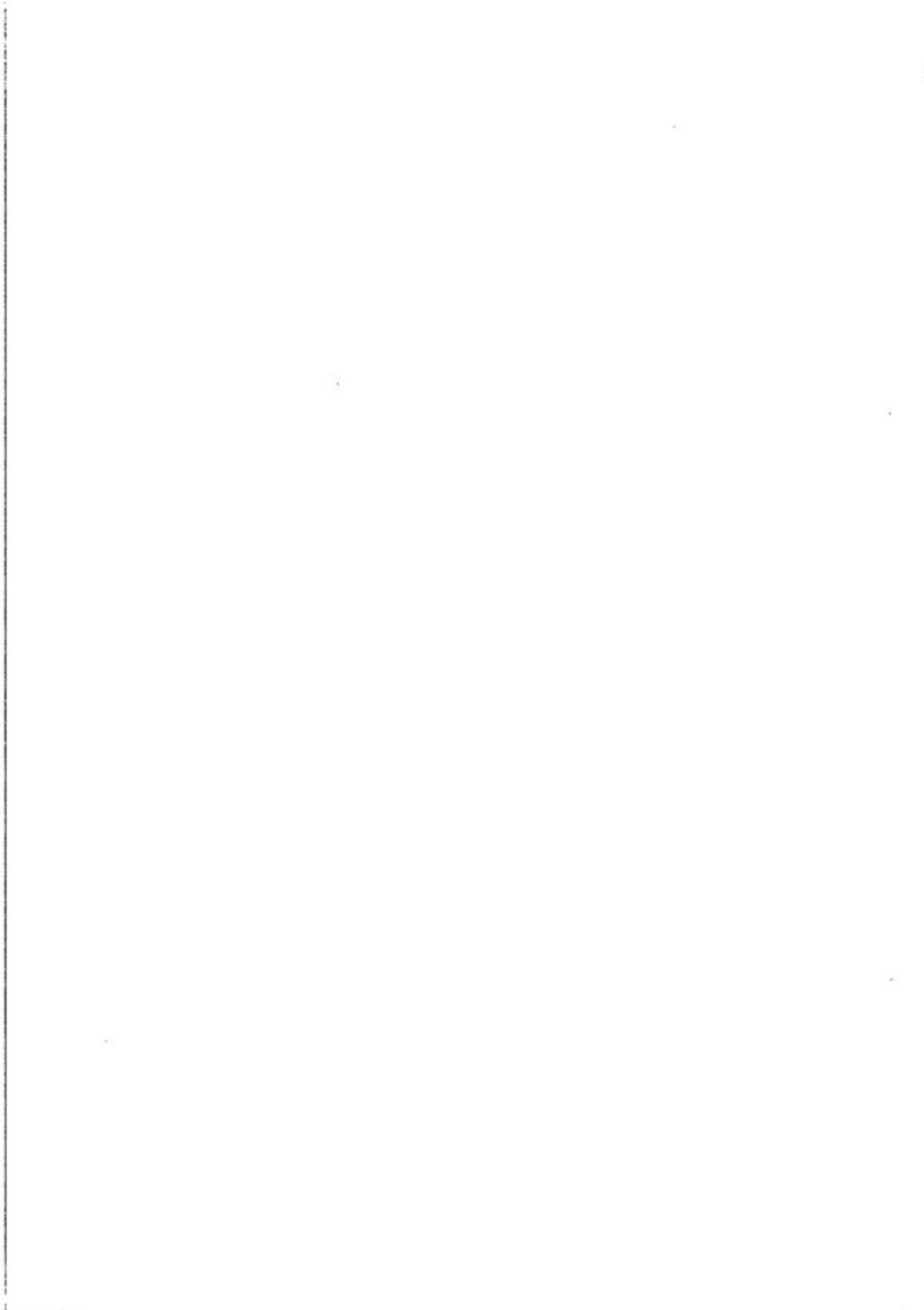




3号墳 調査前全景



同上

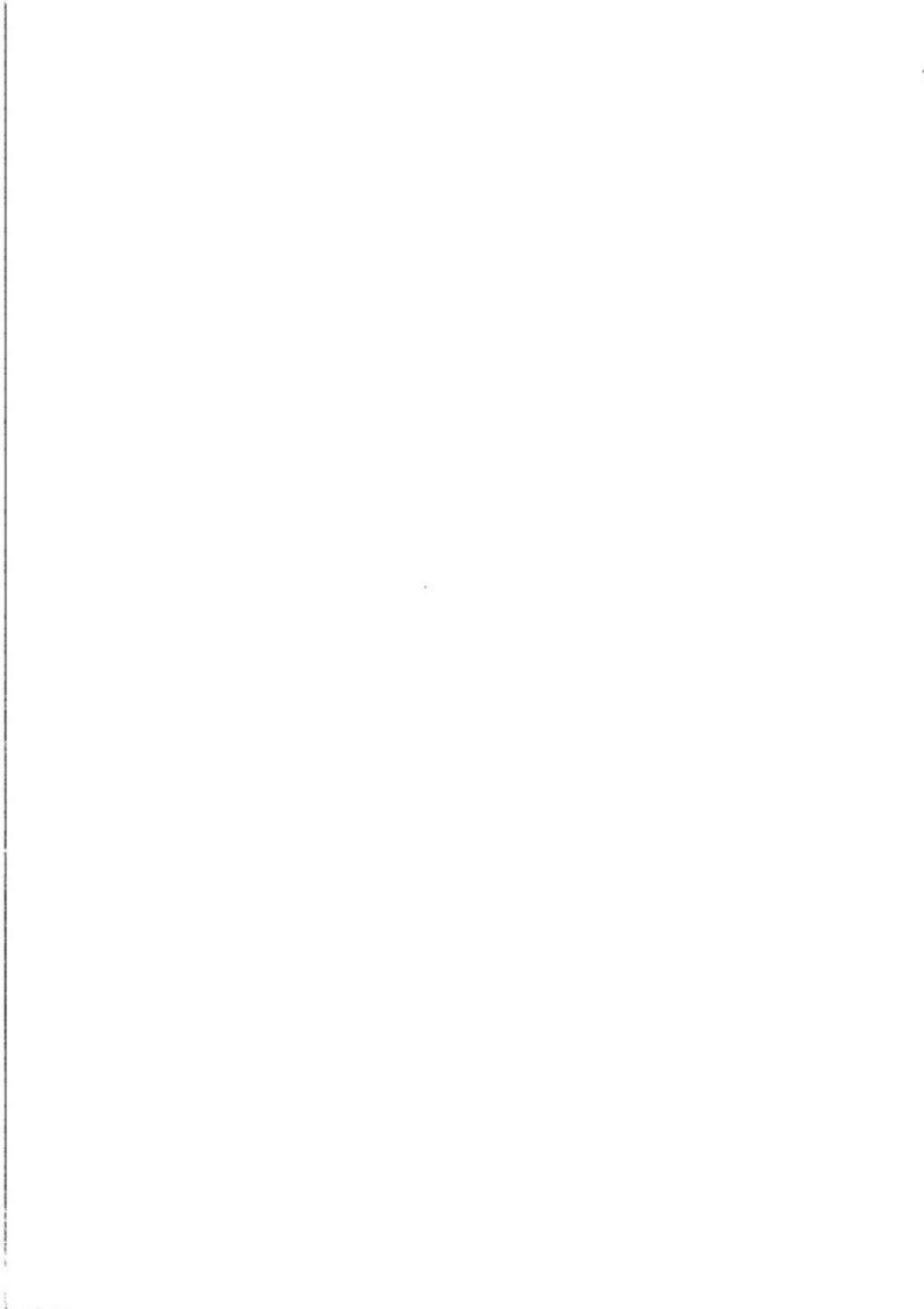




3号墳 獣門部閉塞石検出状況

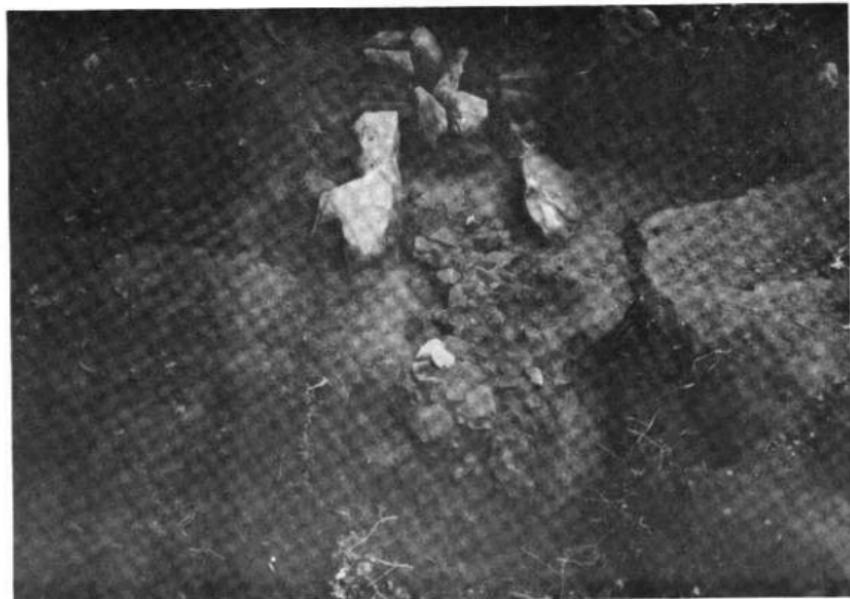


同上



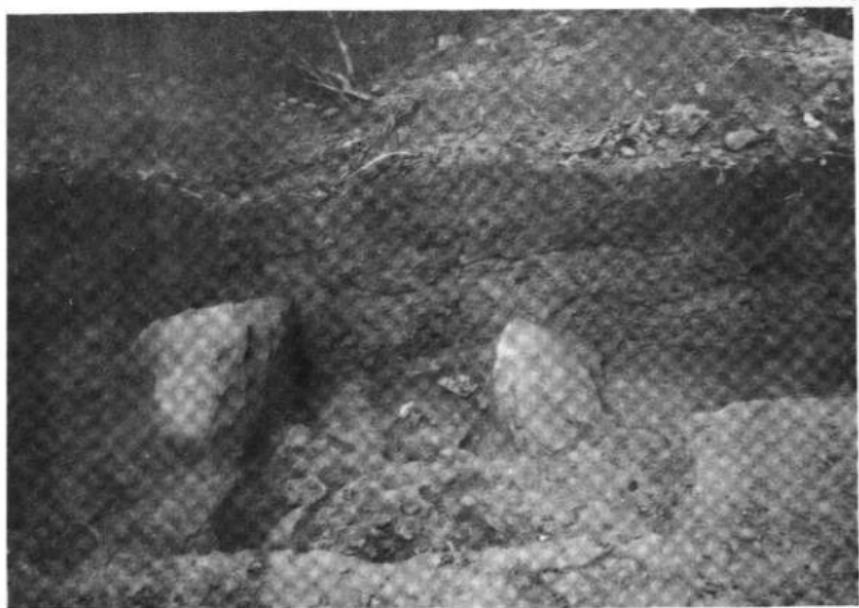


3-B号墳 調査前状況



3-B号墳 石室検出状況



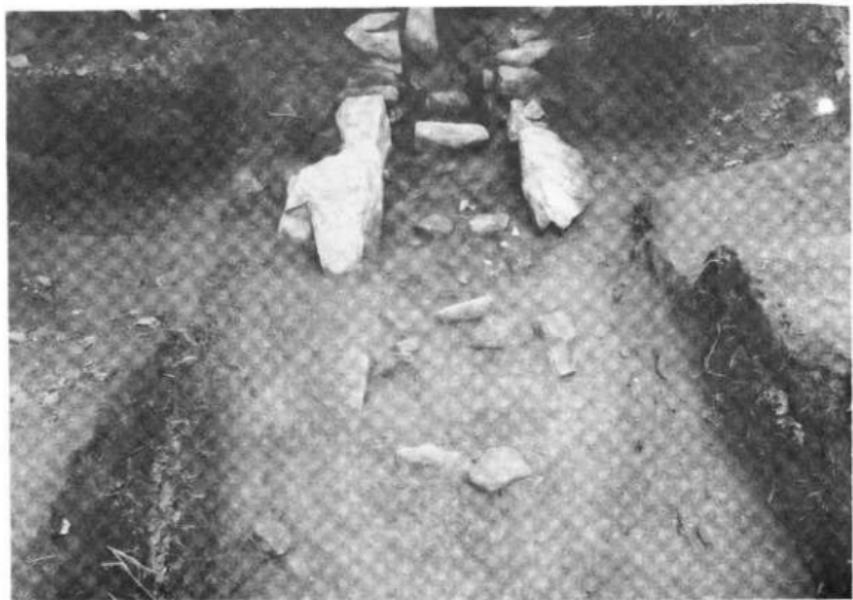


3-B号填 土层断面



3-B号填 槽上砾群检出状况



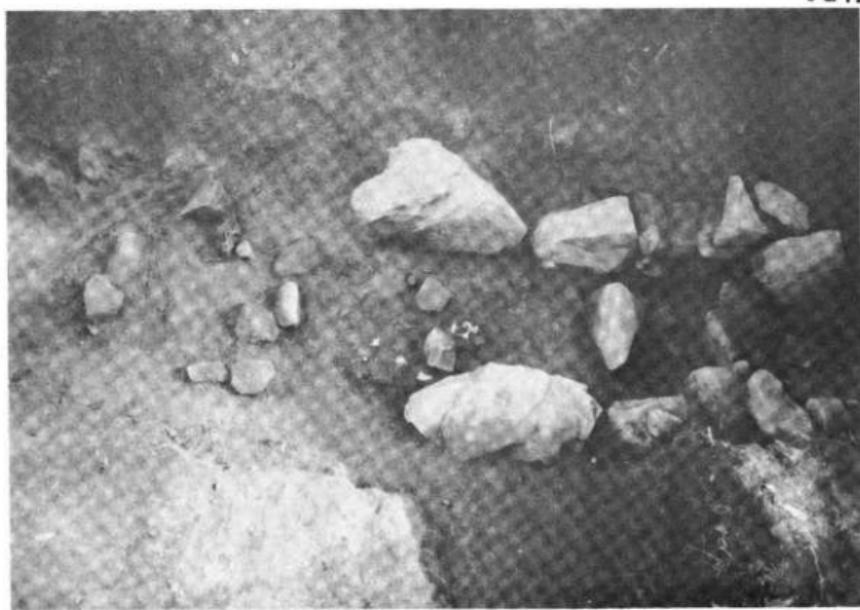


3-B号墓 床面檢出狀況



同上

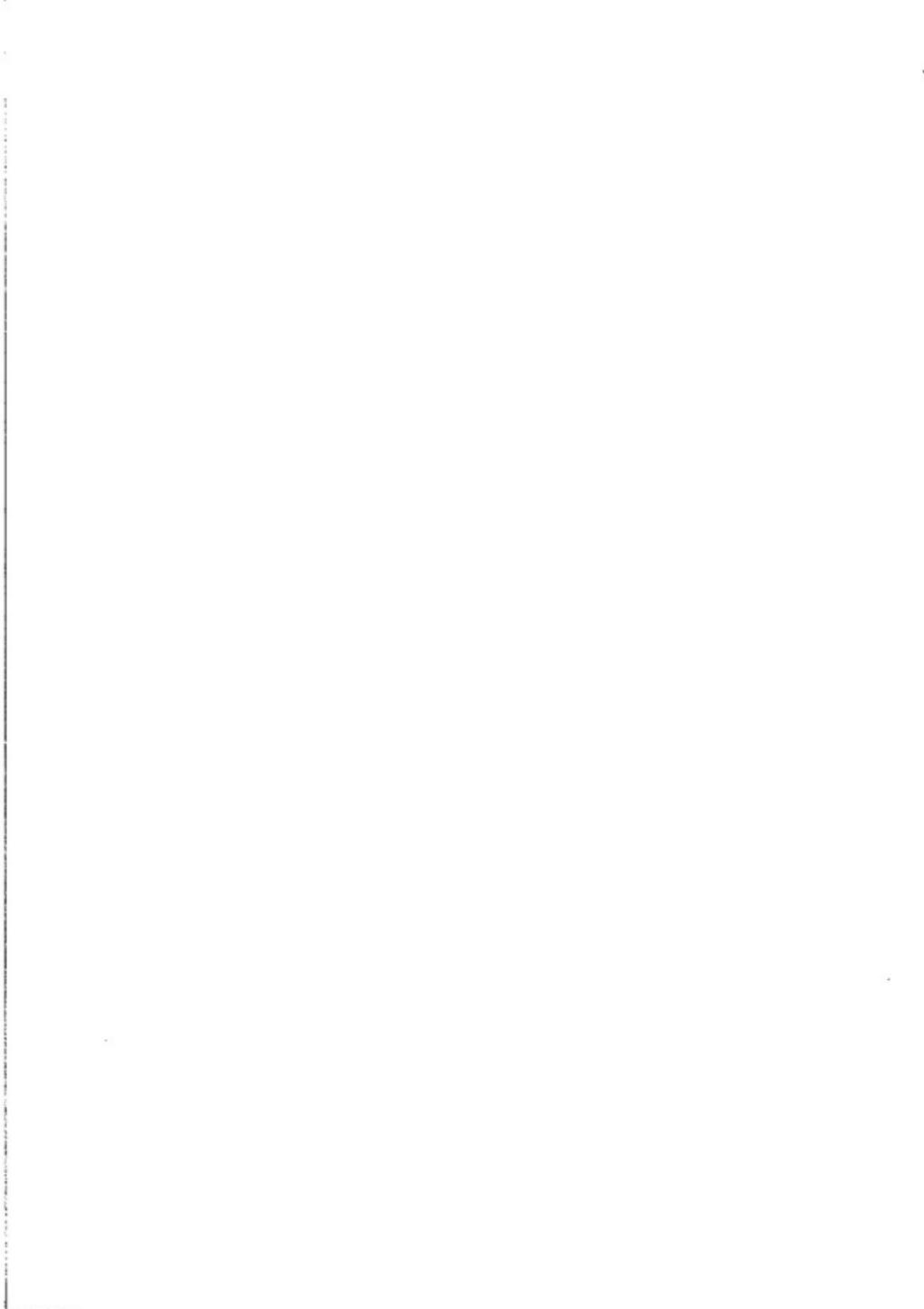




3-B号墳 床面検出状況



3-B号墳 西壁石組み状況

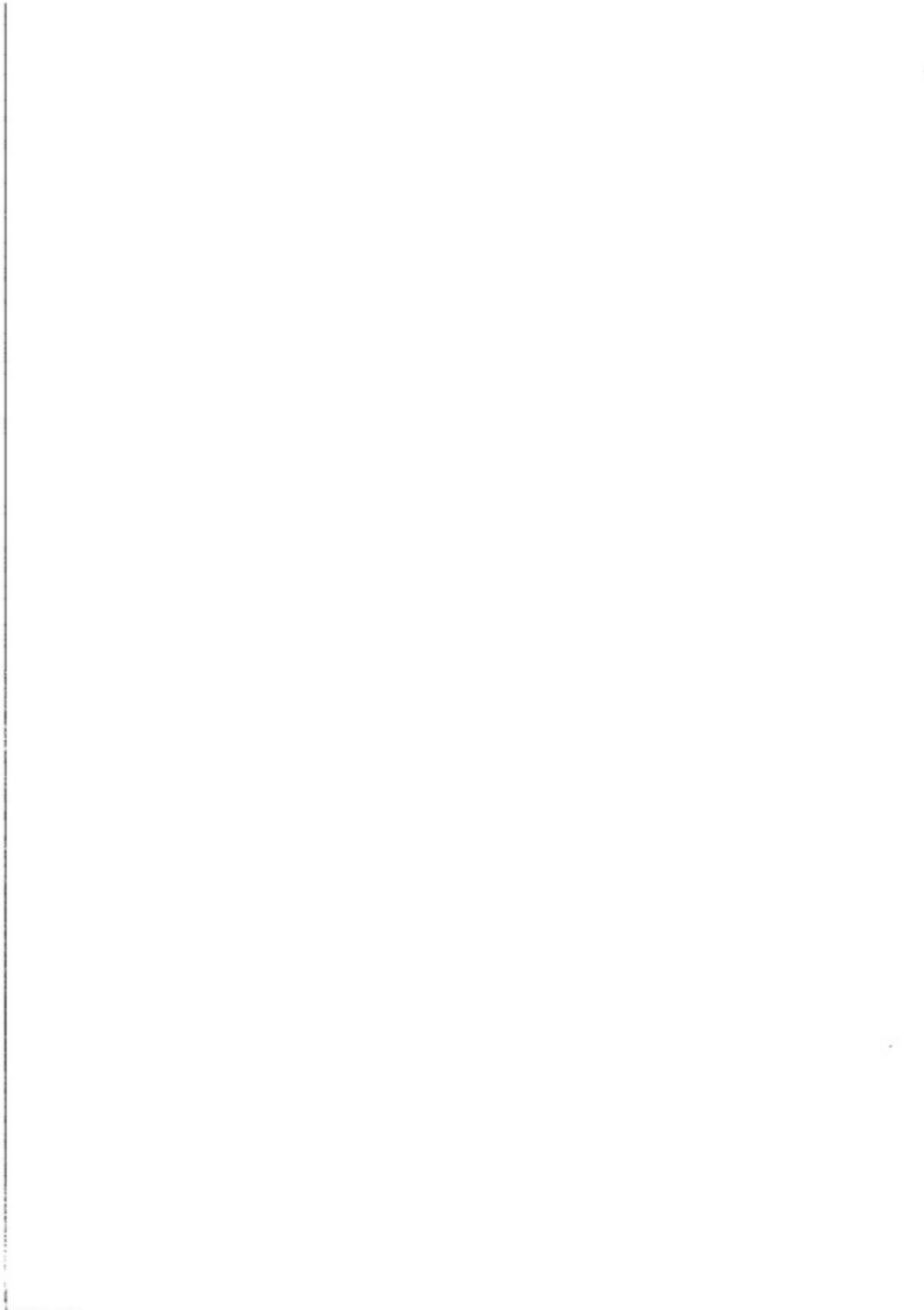


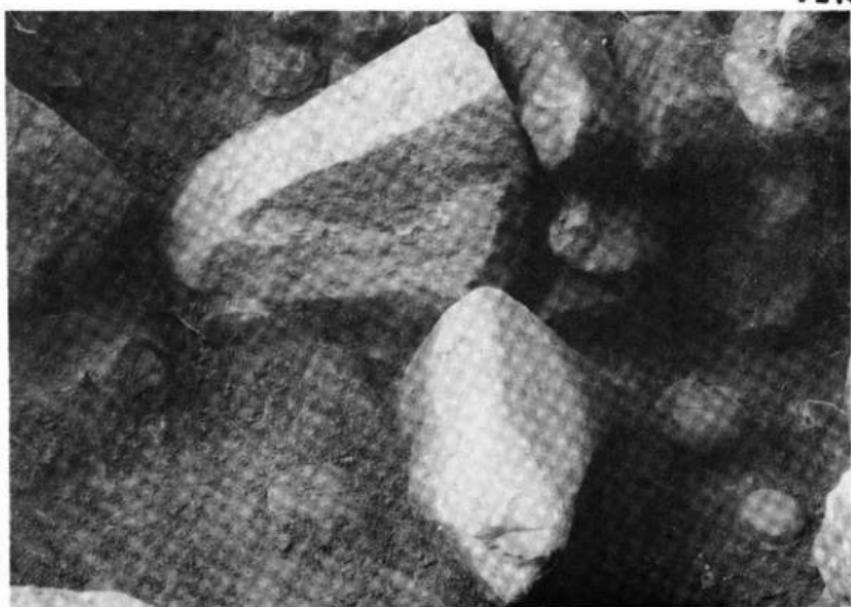


3-B号墳東壁石組み細部



3-B号墳 木棺床全景

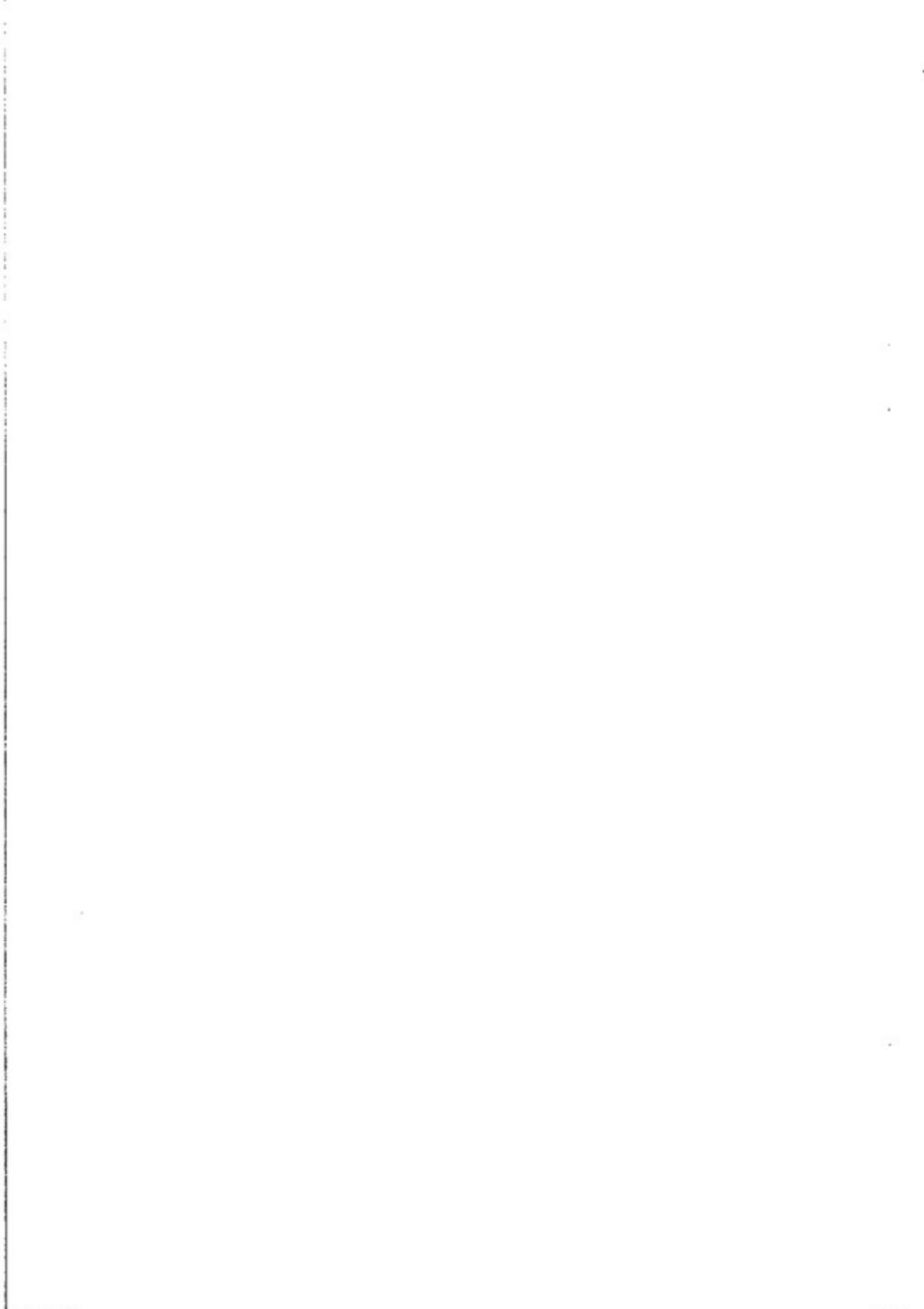


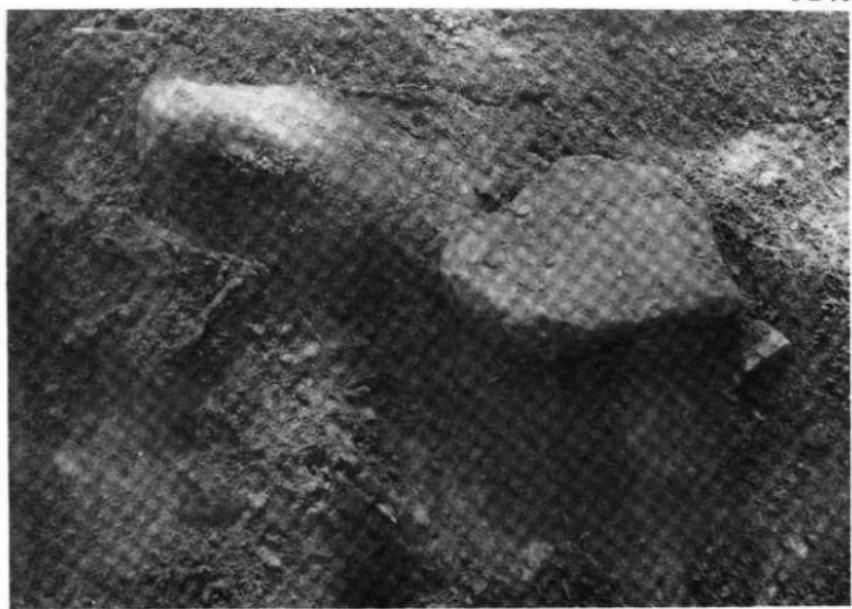


3—B号境  遗物检出状况

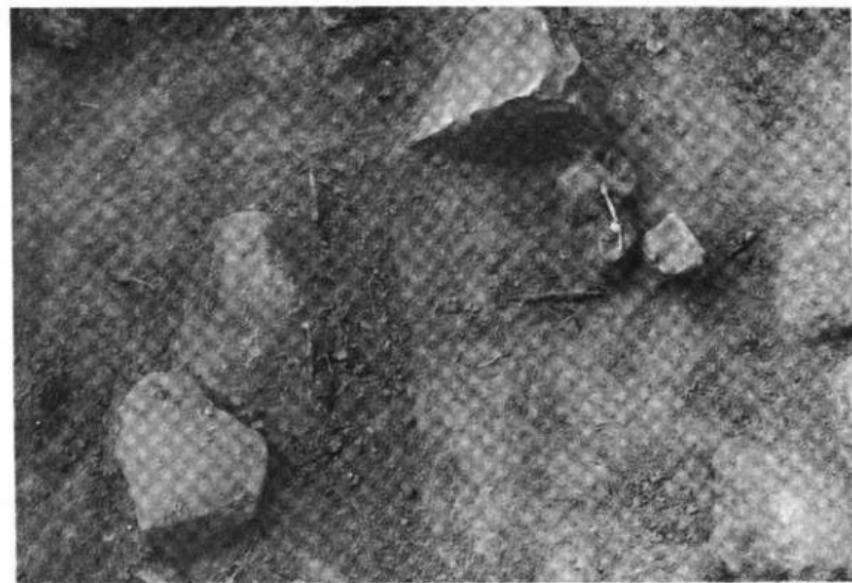


同上

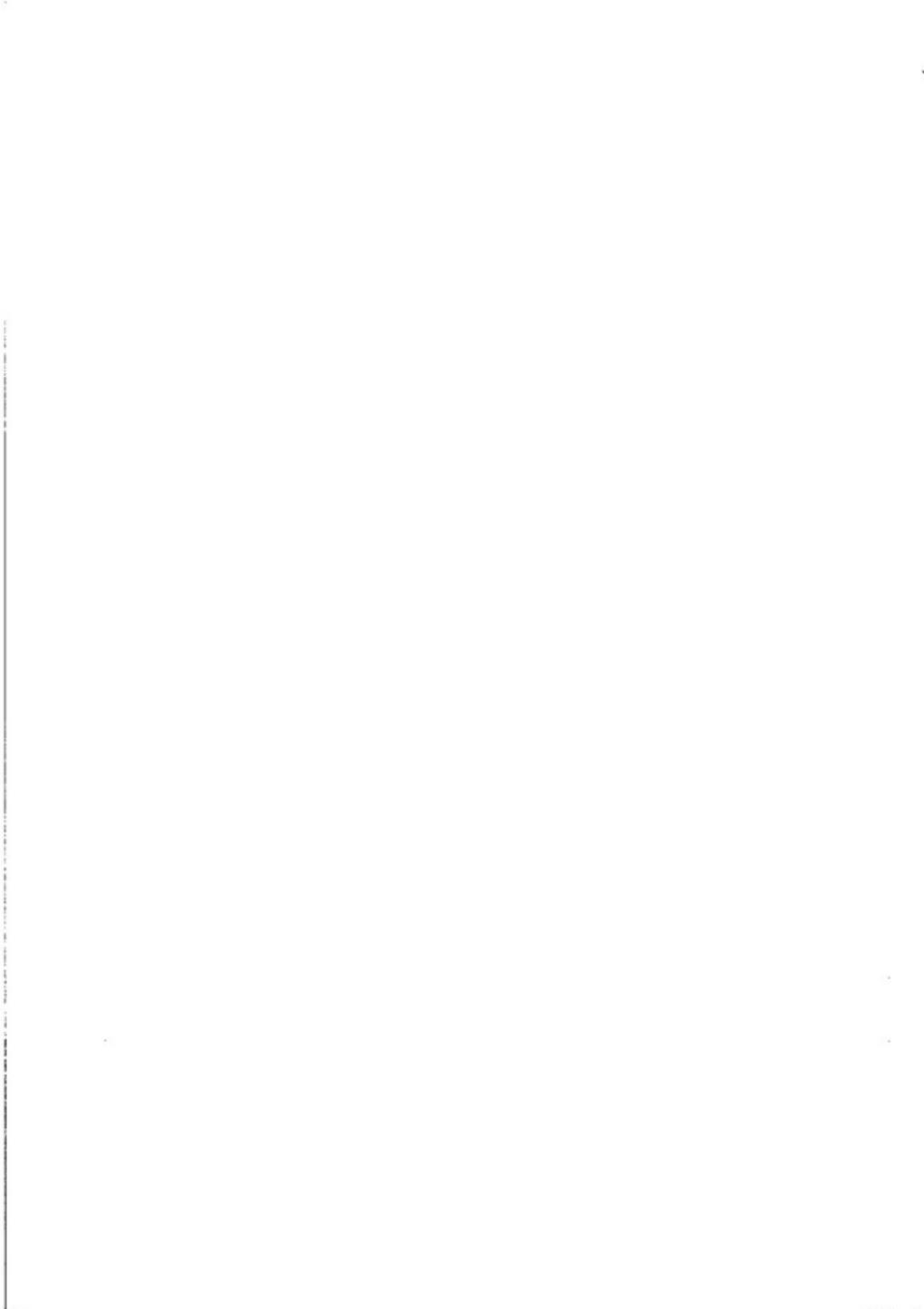




3-B号墳 鉄釘検出状況(小口)



3-B号墳 鉄釘 刀子検出状況

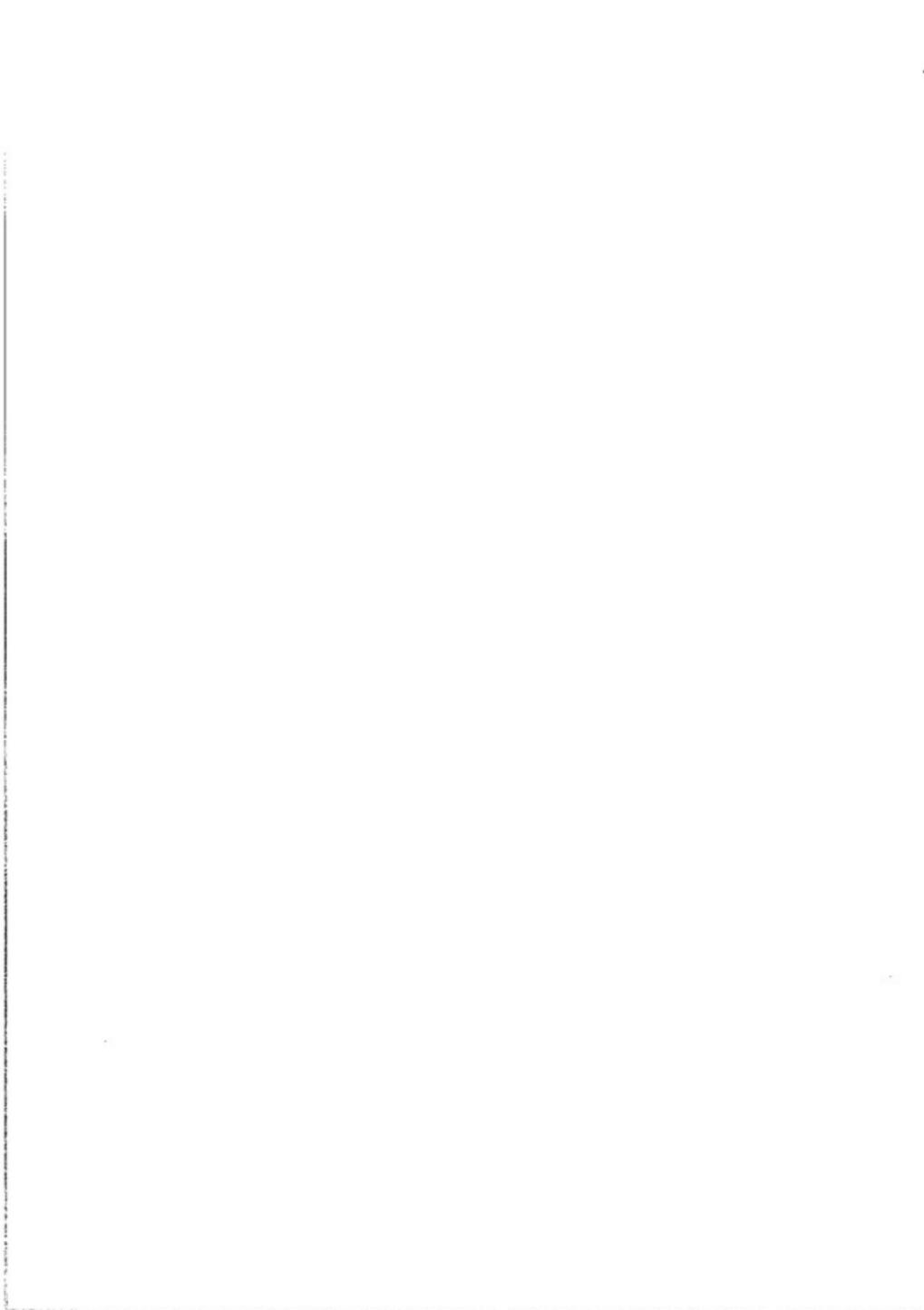


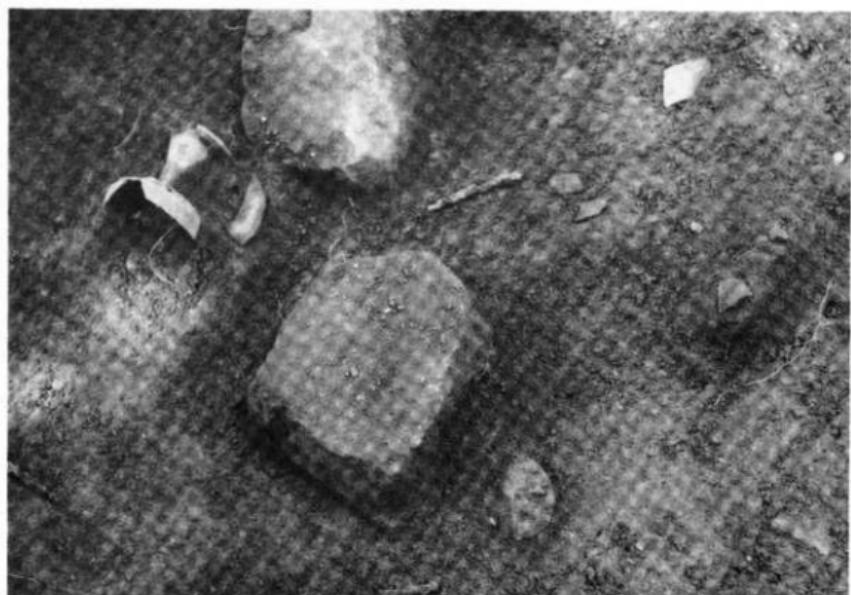


3-B号墳 鉄釘 刀子検出状況



3-B号墳 瓦器検出状況

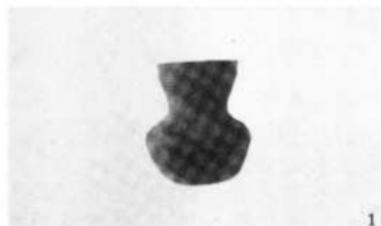




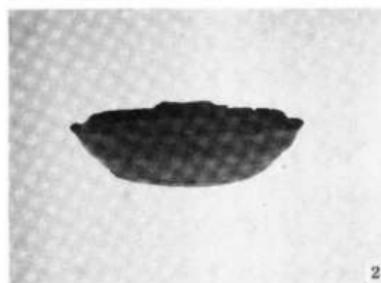
3-B号墳須恵器 鉄針検出状況







1



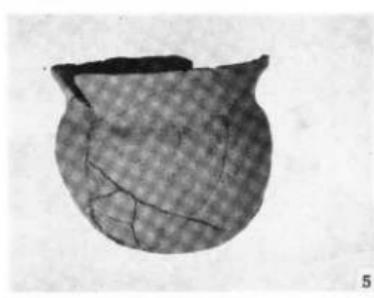
2



3



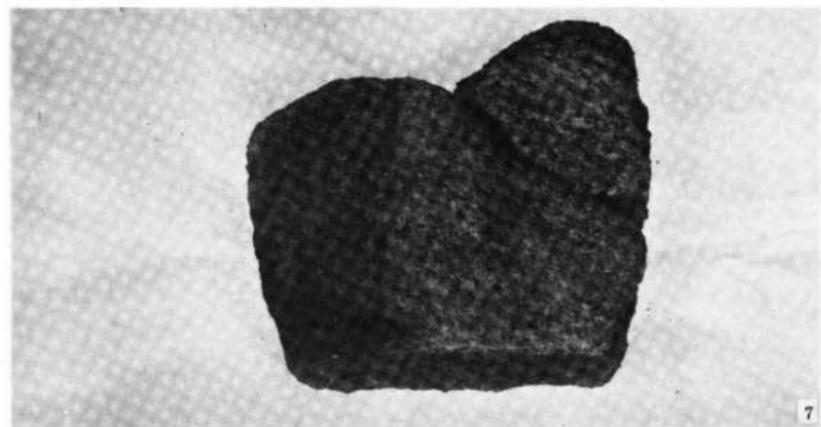
4



5



6



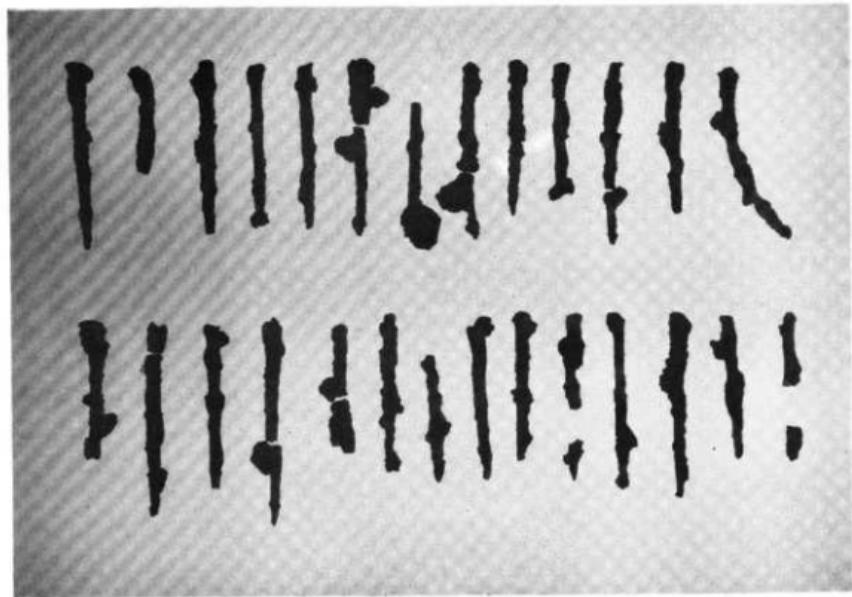
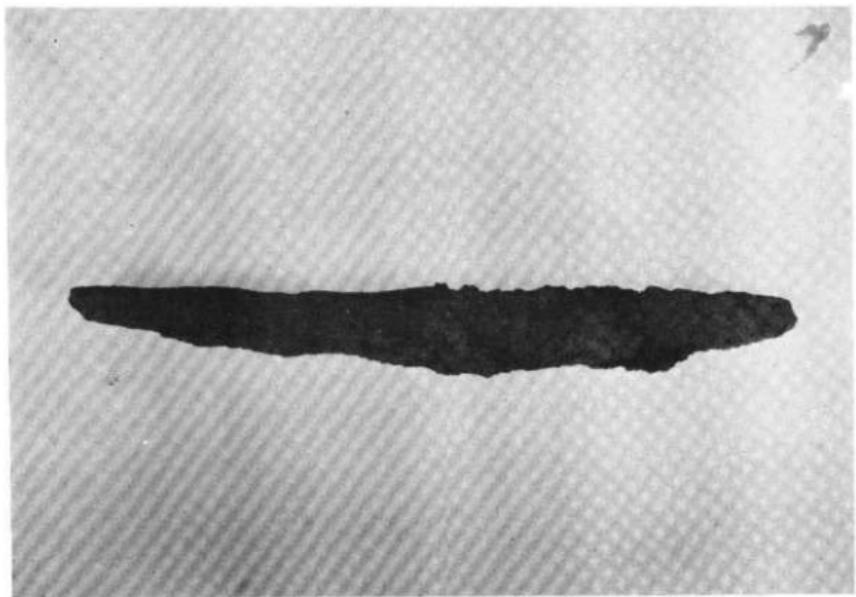
7

1~3 2号墳出土土器

4~6 3-B号墳出土土器

7 2号墳石棺





3-B号 墓出土鉄製品





心合寺山古墳外堀 第2トレンチ



心合寺山古墳外堀 第3トレンチ

